

聖國大業記

下卷

孔

本書目次

- 第一章 理想理學大乘の必要を論ず
- 第二章 宇宙の本体は空なるを論ず
- 第三章 空の普遍無限を論ず
- 第四章 空の無始無終を論ず
- 第五章 空の純同を論ず
- 第六章 空の純靜を論ず
- 第七章 理想理學適當大乘の以下理想理學適當に對する關係を論ず

理學大乘論卷之三理想理學大乘論

第一章 理想理學の必要を論ず

實驗理學大乘論は果して宇宙觀の大意に就き疑團氷解の大見に達せし乎若し達せしとせば人類は唯々實驗理學に偏頼し敢て理想理學に裨補を待たんとするの必要なしと雖も幾分にも隔靴の遺感あるが此必要の存するを認めざるべからず試に實驗理學大乘論の所論全体を回思せば實驗適當を離れざる限りに於ては宇宙の全体に對して燃犀窺底の明見に達せしが如しと雖も然れども其所論中の最も難問に對せし見解に就き適當實驗に參するに不適當實驗を以てして再考せば尙ほ疑團を生するなき能はざるを以て之を曾て理學と認めたる見解に比すれば開發せしと唯々五十歩百歩の相違たるに過ぎざる者なきに非ず例ひば從來物味の善惡等は神經質に歸し物色等は物の固有性に歸して更に疑はざりしも予は分合作用を案出して其物味の善惡等は主として内界分合作用の類合不類合に歸し其物色等は主として外界分合作用の固有性寧ろ類合順序に歸せり然れども若し深く進んで分合作用が類合の順序を逐ひは何故に種々の異狀を爲すかを問は結局分合作用の固有性に歸して説明を止めざるを得ず左れば之を從來の世説に比して進歩せし所ありとせば經驗派の學者が先天派の學者に敵して頻に心性を分解するも物性に至れば固有説を設けて終に之を不問に附するが如く唯々説明に數歩を進むるのみにして全く之を逐くるの實なきが如し約言して之を云ば宇宙の分合作用より成立する實は之を知るも理寧ろ實驗の許さざる實驗に至りては予の分



合作用説も尙や完全無瑕を以て認むべからず其理由は他に非ず例ひは物性若しくは心性は之を分合作用の類合順序より成立すとして説明するときは事實寧ろ適當實驗に於ては疑を起さざるも理論寧ろ不適當實驗に於ては例ひは無意識の偏能成分相依るも意識力を生ずること能はずとし百疑止むべきに非ず而して之を解かんと試むるの方法は唯々適當實驗を離れて理想學に入り之を求むるの外あるべからず果して然れば理想學と講して實驗學を補ふは實に必要なりと謂はざるべからず然れども反對者は凡そ學問の必要は實際に應用の實益あるに依る然るに理想學の如きは講述するの結果たる偶々宗教に實行する利益なきに非ざるも宗教を實行するが如きは常識に依れば之を辨するに足るべし豈に敢て理想學を待つ必要あらんや況んや理想學を講述するの結果は怪力亂神を語つて止むなく折角實驗學を以て進暢せし文筆を萎非する害あるを以て之を講述するは之を講述せざるの害なきに若かず又況んや實驗學は意識原働の知と疑の二岐より成立するとき其知の衍義を取りて發足の起點と爲すも理想學は其疑の衍義を取りて發足の起點と爲すを以て理想學を以て實驗學を補はんと試むるは知を以て疑に交易するに外ならず世上木を以て竹を繼ぐが如き悖離の事實多しと雖も理想學を以て實驗學を補はんとするが如きは其悖離の事實中最も悖離の事實にして且つ大害ある者なれば理想學は之を獎勵するの必要なきのみならず之を撲滅せんことを志士の務むべき所なりとして予の見解を非難するなきに非ざるべし然れども此の如き非難は畢竟理想學の性質が不明なるより起るべき非難にして其性質をして顯明なるを得せしめば敢て避くべからざるに非ざれば之を豫防せんが爲

め上卷及び中卷に於て予の理想學に附せし解義をして更に顯明ならしむる所なかるべからざるなり

予が理想學を實驗不達の學即ち適當實驗不達の學と釋定せしは允當の見解にして世上學者間に敢て異議なかるべしと雖も理想學を實驗學と區別せんとするに當り理學全般の定義を附するに唯々理學と描寫學の關係を主とし此間の區別より直に理學の定義に入り未だ學説と常識の區別に就て考察せし所なきを以て其區分を明知し難く隨て描寫學と理學の區分に對する觀念に精細を缺き隨て實驗學と理想學の混同に陥り易く其影響は遂に理想學の必要を感せざるに至るが故に予が理想學に對する釋定をして毫疑なからしめんには更に添りて學説と常識の區分を觀察して理學の見解を補ひ理想學をして更に明瞭の意義に達せしめざるべからず學説を以て知の一系統を爲すの義とし常識を以て知の一系統を爲さざる義と爲すことは近世學者の定見にして理學の大家スペンサーの如きも亦此見解も外ならず而して氏は常識と學識の關係たる太た密接して常識の那邊に終りて學識の那邊に始まるかは精密に之を分斷すべからずと爲せり若しスペンサーを以て近世理學者の最好代表者と認むれば近世學者の常識と學識の間に於ける見解は此の間に絕對の區別なしと認むる者と謂はざるべからず其理由は他に非ず氏の如く常識と學識を精密に分斷すべからずとせば此一事は即ち此間に絕對の區別を立てざるの明證たり且つ氏の如く有系統の知を以て學と爲すも有系統の知は尙は無系統の知をも幾分か修正して之を其部分と爲せばなり果して然れば此見解の如きは此二者を分別するの正見に非ずとして他に其方法を求めざるべ

からす而して之を從來世人の熟知する所に求むれば二種あり第一種は無系統の知なる語に更ゆるに耶なる語を以てし有系統の知なる語に更ゆるに正なる語を以てして常識は之を耶識とし學識は之を正識とし此間に區別を立つると是れなり第二種は常識は普通凡識とし學識は特有卓識とし此間に差別を立つると是なり今此二種の方法を觀るに皆亦此二者を區別するの正見なりと認むへからす先づ第一の方法に就て之を説かんか古今學識を以て分類を許す知識必ずしも正識ならざるも若し假りに之を許す知識を以て盡く正識なりとし學識を以て正識を指すの義とせんか普通凡識中の正なる者をも之を常識の一部と認めて學者と不學者の間に絶對の差別を認めざるに至らざるを得ず既に之を認めれば此方法も亦正見たるへうらす又第二の方法に就て之を説かんか此方法の如く普通凡識を常識とし特有異識を學識とし此間に區別を設くるときは百人中の九十九人が遍有する知識にして百人中の一人か特有する知識に優るも之を常識と認めざるを得ざるを以て既に之を認むれば其一人か特有する學識をも常識と認め此間に區別を廢するか否らざれば之を學識と認めて其區別を無實に付せざるを得ず既に之を付すれば此方法も亦正見たるへからす果して然れば此二種の方法を措て他に此方法を求めんか常識は之を舊識とし學識は之を新識として此間に區別を立つると亦此方法の一種なるへし蓋し此方法たる通俗に於て學者を物知りと唱ふの點より觀れば世人の既に暗知する所にして實に正確たらざるへからず故に茲に其然る所以を述ひんとす凡そ學問と實行の間に業を分つは新知を利用するの便法を得んとするの外あるへからす更に他語を以て之を云は實行は知の結果にして實行に學問以外の知を以てする實行と

學問を以てする實行の二種あり前種の實行は舊行にして後種の實行は新行なり而て新行に要する知の新なるも亦自然なりミールが實行は學問に先すと説く如きは唯物論者の習癖として躬行は知識に先するの妄見を意味するに似たれども此説の精神は常識が學識に先するを證明するに止るのみ故に實行と學問の間に分業を行ふの目的は舊知の利用を便すると同時に新知の製造を便するに在りと認むべきのみ其理由は他に非ず學問の實行に必要な主意は新見の正理を以て舊來の謬見に更ひ若しくは空前無類の新見を以て實行を擴むるに止まらざるを得ざるを以てなり果して然れば此區別の方法は前諸種の方法より更に此分業の主意に適ふを以て前諸方法の如く悖戾矛盾を意味する所あるへからす例ひは夫の九十九人が遍有する知識と雖も百人中の一人に取りて新知なるときは之を學識と認むへし反して百人中の一人が特有する劣知にして九十九人に取りて新知なるときは之を學識と認むへくして二者の間に一大の絶對差別を失ふ所あらず又知の正耶を論せず新なる者は之を學識と認め舊なる者は之を常識と認め學識の耶なる者を枉けて之を常識と認め常識の正なる者を枉けて學識と認むる所あらず又無系統の知をも有系統知の新分と認め遂に學識と常識の分界線を滅却するに至らす故に予は此區別の方法を以て常識と學識の間に於ける差別の眞理なりと斷して疑はざるなり然れども反對者あり此見解の如く唯々常識と學識を舊新の區別と認め此間に耶正の差別を設けざるときは夫の耶蘇教讒誣事件を以て有名なるプレーが地球を一大の動物なりと妄像せし如き心事も尙ほ之を學識を以て分類せざるへからざるの謂れなき不道理に至らざるを得ずとして此見解を非難せんか反對者試に思ひプレーが此見解

の如きは有識の人より之を觀れば實に怪談の限りなりと雖もプレーが當時世評の如く精神惑亂せしに係らず此見解が彼の舊見に比して新見なるときは彼れに取りて學說たるは固より論を俟たす且つ發狂者の思想と雖も曾て思ひ當らざる新見は縱令ひ錯戾の思想たるに係らず健全なる思想と共に之を分類するときは學識を以て認むべきに非すや若し然らすとせんか茲に不動説を唱ふ者あり吾人假りに曾て此説を唱ひし者なしとして此説の學識か將た常識かを評議せば何人も之を常識とも認めさす又學識とも認めすして止むべきか止むべからすとせば必ず學識を以て認めざるべからず既に之を學識を以て認むればプレーの唱ふ動物説の如きは開明人より觀れば常識寧ろ瘋癲人の妄像即ち常識中最も劣等常識の一種を以て目すべしと雖もプレーに於て果して新見なるときは彼れに取りて學識たるは固より未開人より觀れば學識を認むるとなしとも言ひ能はす要するに學識と常識の區別は社交の關係を目的として立てし區別なりと雖も極義は知の舊新を分つを以て其目的と認めざるべからず果して然れば此等非難の如きは予の所信を動かすの効力なしと謂ふへし説て茲に至れば世人の所謂實際と學識の乖戾を唱ひて學識を睥睨するは學者が學識を絶對的正見なりと固執するの反動たるは明瞭にして世人若し予の常識と學識の區別に對する見解に依れば學識の概して常識より正確なるは其分合作用の一層類合を遂けたる結果なるを知るに難からず隨て此の如き突飛の所爲に出でざるに至らざるを得ず故に此區別の方法は毫疑を許さざるの眞理なりと雖も茲に理想學の必要を説くに當り先づ此眞理を利用して理想學の存在すべき所以を説かんには之を先づ常識と實驗描寫學の區別に適用し然る後更に常識を

實驗學の區別に適用し更に此眞理を申明して理想學の常識に異る所を推察する所なからず故に先づ常識と描寫學の區別を觀察すへし
 上卷に於て理學の定義を論するに當り描寫學の理學に異る所は理學は究理的の知寧ろ考察を指し描寫學は記臆的の考察を目し考察の究理的に屬すると記臆的に屬する相違なることを述ひたり理學と描寫學を以て果して此相違ありとせば實驗描寫學の如きも常識と同質一體たるの觀なきに非す其理由は他に非す常識は何等の常識と雖も描寫學と一般に記臆的の知識ならざるべからず例ひは吾人が日常辨務の際に依違遲疑の状態を示すを觀れば眞に新思を案するに似たれども常識所業を離れざる限りは唯曾て記臆せし理事を思出せんとするの結果なるか如し然れども常識と描寫學は固より別者なるを以て相混すべからざる者なり而して其相混すべからざる所以は唯舊新の相違あるのみ例ひは史書の如き若しくは小説の如き若しくは此他描寫學にして常識の居多なるのみならず識者より觀れば全く陳腐に屬する者も尙ほ高等の描寫學と共に描寫學に位するは無識者に取りて描寫學たるの新識を存するに依るか如し果して然れば描寫學と常識の區別が考察の新舊を異にするの相違に依ること更に疑ひなきなり

更に進んで實驗學と常識を對照するも亦此間に新舊の相違あること明瞭なり抑も人心智部の成立は考察力先づ起り然る後記憶力起りて完全するか故に理學を描寫學に對して究理の學と解するときは理學は人心か人心たるの地位を得たる時代寧ろ人類か最下動物たる時代に於ては智部の第一形にして描寫學は第二形なりと認めざるを得ず既に之を認むれば常

識の如き亦理學の結果たらざるを得ず蓋し此順序は嬰兒の漸く智能を發し學齡に達するに及ひ學課を逐ふの經歷に照徴せば明瞭なる事實と謂ふへし左きは智能發育の此順序より觀れば描寫學若しくは常識は知の新様体を占め理學は知の舊様体を占むるを以て常識若しくは描寫學は新識に似て理學は却て舊識なりと認めざるを得ず然れども此の如きは成文描寫學も成文理學も未だ發見なき智能の状態に對し假りに常識と學識の區別を適用せしむるとき建つべき見解なるのみ若し進んで此發見の以後に係つて此の三識を備ふべき智能の成立を觀察せんか常識先つ起り描寫學之に繼ぎ理學最も終に起るは智能發達の順序たる實に明瞭なりと謂はざるを得ず果して然れば中卷第七章に描寫學の結果なる理學云々の語を用ひたるは假見を用へたるのみ成文理學の描寫學に比して新識たる固より疑ふべきに非ず既に之を疑ふべからすとせば理學の常識より新識たるは亦疑ひなきなり

實驗學の常識に異る絶對の異徴にして果して新舊の相違に存すとせば吾人が適當實驗未到の假定界に對する理想にも亦理想常識即ち不適當實驗常識と理想學識の二種ありて而して理想學識に描寫理想學と理想理學の二種あるも此二種の理想學識を學識と稱するは實驗學に對するの謂に非ずして唯理想常識に對して絶對的に新なるに依るは明瞭なるか故に縱令に實驗學に於て理想學を否定するも直接に實驗學を離れて存在せざるの理あるへからす果して然れば英國の理學派か獨逸の理學派に反對して理想理學の存在を否定するか如きは此理を知らざるより起る暴見と謂へくしてスペンサーか靈力存在の觀念を以て彼れか實驗理學の不適當基礎と爲すか如く又適當基礎と爲す如く前後矛盾の論定を爲して始終一貫の論

旨を示さへりしは理想理學の存在を否定せし結果たるのみ然りと雖も獨逸の理學派か印度理學者と共に理想理學を過尊するの甚しきやヘーケルの如きは英國派の實驗理學の大乗を否定して理想理學を唯一の眞學と認むるに至れり粗暴も亦更に甚しと謂ふべし畢竟此二派が此の如く見解を異にせし近主因は英國の理學派は理學と云は確實を以て理學の絶對性と偏想し又獨逸の理學派は予の所謂識新に似て非なる彼の所謂識深寧ろ識虚を以て學說の本性と認むるは理想理學を理學と稱するは理想常識に對するの謂たるを知らず唯々常識の實驗若しくは實驗學に對するの義と偏想せしに依るか如し故に獨逸の理學派にして考察の舊新を以て之を常識と學識に區分する方法は唯々同種の考察を舊新の相違に依りて類分するに在るを知らずは實驗理學の大乗を否定するに至る能はず又英國の理學派にして確實は理學の附性に過ぎずして本性は唯々常識に對して新生なるに在るを知らずは理想理學の存在を否定するに至る能はざるや知るへし

理想理學の存在を觀察する既に此の如く明瞭なるを得たれば今を此學の必要を觀察する所あらんとす抑も古來此學の必要を説く一にして足らずと雖も茲に參觀の價値を有する者は予の所見に依れば唯々二種に過ぎざるが如し一種は此學は予の所謂宗教主体を發達せん前に先つ此學の發達なるへからすとて之を必要と認むる者は是れなり一種は實行に於て蛇足なるも思想鍛練の効能ありとして之を必要と認むる者は是なり蓋し此二説の如きは之を皮想せば理想理學の必要に係つて全く反對の見解を取りて其必要を證明せざるに似たれども其徹底の眞意を探れば相容れて之を證明せざるを得ず其理由は他に非ず理想理學を講修

するは理想常識を發達するの結果を生し此結果を生ずるは宗教主体を發達するの源因と爲るを以て後説は宗教の手段として理想學の必要を認むるの事實を意味し前説の目的と背馳する所あるへからず果て然れば理想學は自力宗教論者が妄像するが如く宗教を自力的と認むれば直接適用の點に於ては全く無用の贅物なるも宗教を他力的と認むる上は直接適用の點に於ても此學の必要たる敢て疑ふ所あるなし然れども理想學の此必要は唯々直接の必要に過ぎず理想學亦間接の必要あり間接の必要とは何ぞや理想學適當が直接に實驗學適當を否定するに係らず間接に之を利用すると一般に實驗學適當も亦理想學を否定するに係らず之を利用する謂にして此必要たる消極的の性質なるも亦理想學の必要なる一端たるへし例ひはニュートンの引力説の如きは中卷に於て説く如く妄説なるも理學の開發なき今日に於ては假りに尙ほ之を有益と看做して此説の成立せし源因を尋ねれば機會因は椅子墜落の事實等に在るも主因は間接若しくは直接に造物主を引力の最中心と認むることにより又スペンサーの可知力説が成立せし源因は氏の靈力説を間接若しくは直接に參觀せしに在り又予の分合作用が成立せし源因は氏の靈力説を唯間接に參觀せしに在るか如し果して然れば理想學は不開實驗學を補助する直接源因たりしこと有る上に眞識實驗學を輔育する間接源因と爲りて止まざるは明瞭にして此學間接必要の存する所以亦明瞭なり他語を以て之を約言せば理想學直接の利益は宗教實行上の常識を修正するに在り間接の利益は下章に示す如く理想學上所謂空若しくは同の觀念を發育して實驗理上所謂空若しくは同の觀念を否定すると同時に消極的に之を奨励し且實驗理上所謂空若し

くは理若しくは同の觀念等に於ける未製原料を支給するに在りと謂ふを得べし理想學既に此等の利益ありとせば此學の大乗を講ずるの必要なるは敢て論を俟たざるなり約して本章の主意を述べれば學識寧ろ學問的の疑知と常識的の疑知との間に存する最正なる絶對の區別は考察の新舊を異にするの相違を標準とするに在り正不正の如きは相對の區別を示すに過ぎざるを以て理想學も亦此附則標準に就ては絶對則能はざるも此本則標準に就ては適當に則り能ふは明瞭なり其理由は他に非ず理想常識と理想學識に於ける耶正の如きは之を絶對に辨知せざるも舊新の相違に至りては絶對に之を辨知するを許すを疑はされはなり果て然れば支那印度理想學派の全体及び希臘の或る理想學派なる不開の理想學者が此學を過尊するのは是非は姑く之を措くも獨逸理想學派が理想學に於ける諸旨の是非は唯々理想學の範圍内に於てすべきを知らず理想學の實驗理學に優るの眞理なるを誇言するの非なるは固より論を俟たざるも英國理想學派が理想學の眞知ならざるを看破するに乘し之を新理ならずとする語氣を露はし此學の存在を否定すると同時に必要を非認するも亦非なりと思はざるを得ざるを以て予は英國理想學の如く理想學を非認せざると同時に獨逸理想學派の讒に倣ふと謂はんより寧ろ倣はずして理想學の存在をも必要と確信し茲に先づ此學の大乗を講せんと欲するのみ

第二章 宇宙の本体を空なるを論ず

上卷に於て宇宙に於て二部あり一部は知るへしと知れたる力の空及び時の原形に駕するの

狀況にして他部は知るへしとも知るへからすとも未だ知られざる力の空及び時の原形に駕する状態なりとし宇宙に二種あるの意を開述し實驗理學と理想理學の兩存するの理を結論せしは直接に此二學を對照して兩虎相立たざる勢に立つ實驗理學と理想理學を假りに兩存すへしと爲し此二學の略見を執りて理學大乘の不當部即ち自安を設くるの主意に出で舊來粗造の學説を適用せしを以て完全の見解に非ざるは固より論を俟たす故に中卷に至り知るへき力の空及び時に駕する状態とは空及び時なる二種の力が類合の順序を逐ふて轉位變居する義なりと見及して實驗理學適當大乘即ち眞誠の實驗理學大乘を講了せし上は今や知るへしとも知るへからすとも未だ知られざる宇宙論に入るに臨み之を間接の參觀とせは從來の不當實驗理學を間接の參觀とせしより更に精密の見解に達するを得へきは自然の順序なるを以て曩さに此宇宙を知るへしとも知るへからすとも未だ知られざる力の時及び空に駕する状態なりとせし見解をして更に精密にする所なかるへからす抑も予が理學大乘不適當に於て實驗理學と理想理學の兩存を假定して知るへしとも知るへからすとも未だ知られざる宇宙に係つて此定義を執りしは主としてスペンサーの靈力説に根底するも氏の靈力説たる氏が實驗理學と理想理學の精密なる界線を分辨せざるが爲め之を實驗適當より成立すとも認め又不適當實驗より成立すとも認め太た曖昧に屬すと雖も氏が實驗上間接に靈力の存在を認めざるを得すと爲せし點より視れば氏は靈力の存在は不適當實驗に於て信し得へしとするの見解なりと謂ふを得へきも氏が實相學の存在を否定すると同時に宗教不適當を宗教適當に混し宗教の存在を許せしより觀れば暗に理想理學を存在すとすとの見解なり

と謂ふを得へし果して然れば氏が靈力の存在を説くの目的は理想理學の大乘を示すに在りと謂ふ得へく且つ此説は理想理學を以て理學の實大乘と誤認せし他の理學者が理(体)若しくは道(体)若しくは法(体)若しくは心(体)を以て理想理學大乘の主意と爲せしに比すれば却て理想理學大乘に適すと雖も然れども眞に適せざるに至りては五十歩百歩のみ其理由は他に非す理想理學は固より實驗適當より成立せすと雖も適當實驗と最も密接の關係を有する不適當實驗より成立せざるへからざるが故に理想理學の大乘は實驗理學の大乘と密接して分離するへからざる疑即ち假信即ち準識即ち準合分作用を以て成立すへくして而して靈力説は適當實驗を意味せざるに係らす之を理(体)若しくは道(体)説若しくは法(体)説若しくは心(体)説に比すれば大に適當實驗に密接し且つ分離し難き準識にして理想理學大乘中の一大乗に近きも尙ほ之を距たる者と認めざるを得ざるの理由あるを以てなり故に此理由を説明せんが爲め靈力説と理(体)道(体)法(体)心(体)の諸説を對照して其優劣を觀察する所あらん抑も宗教主体を行ふ目的体を定むるに當りて宇宙の大本を理(様体)若しくは道(様体)若しくは法(様体)若しくは靈力体と認むるより心様体と認むるの允當なるは固より論を俟たす其理由は他に非す理様体若しくは道様体若しくは法様体若しくは靈力体を以て宇宙の大本と認むる上は此等諸体は意識をも意味すと謂ふを得へきのみ非す心能以外の靈能をも意味すと謂ふを得へきも宗教主体を行ふには爲るへく目的体を明解するを要するを以て其心能以外の靈能を心能と共に明解せんとするときは心体論より却て神尊を傷くれはなり然れども更に實行を距たる理論を主とする上より觀れば靈力説は固より理体説若しくは道体説若

しくは法体説の如き皆心体説に優る者と謂はざるへからず其理由は他に非ず理(体)説の所謂理若しくは道(体)説の所謂道若しくは法(体)説の所謂法は心より劣る物体に比喩を取るか又は唯々心に比喩を取りて宇宙の大本に命名するの語なるも各説に於て其語に與ふ意義は縦合ひ靈力説の如く完全ならざるに係らず心体説より宇宙の大本を大能視して其存在の假相觀を立つ易しからしむる所あればなり果て然は心体説の如きは靈力説と目綱の相違ありとして之を對照するは姑く措き理体説道体説法体説の三種を取り順を逐ひ之を靈力説と對照すること允當と謂はざるを得ず凡そ近代理學上理若しくは道若しくは法なる語は之を作用其れ自身を指すの義に解せず唯々作用の關係を指すの意に釋し作用其れ自身を指すには獨り力なる語を用ふるは常見なりと雖も近代より更に實驗理學と理想理學を混同せし時代に於ては却て理若しくは道若しくは法を本に立て力を末に置くは理學者の常見なるか如し例ひは朱子が宇宙の原質を理氣と説さしか如き之を皮想せは理と力に本末の區別を爲さざるに似たれども理を主働者とし氣を被働者とせし極意を推さは理を本に立てたるは明瞭なり之に加ふに周茂叔の大極を純理なりと解せしを以てせは理を本に立つるは宗代儒家の常見と謂ふへし又老子が大極は適當の名なきも強ひて名くれは道なりとせしを推さは道を本に立つるは道家の常見なりと謂ふへし又法華經に法を説くの意を推さは法を本に立つるは佛者の常見と謂ふへし若し此等の事實は唯々東洋理學者間に限るを以て之を以て普く古代理學者の常見なりと推すは充分ならずとして更に西洋理學者間に此等の事實を求めんか西洋理學者の如きは予の所見に依れば宇宙の大本に命名するに道若しくは法なる語を用ひ

しは近世に至りターウヰンが自然を法則の團塊と爲せしか如き此他唯物論者か自然法を萬物存在の源因と爲せしが如き事實を除けば曾て之を發見せずと雖も道若しくは法なる語と同義なる理なる語を以て萬物に命名せし學者は萬物の原子は唯一絶對の理なりと認めたるピサゴラスの如きあり又神は永存不變の理と認めたるプラットの如きあり亦西洋古代の理學者か理を以て本と立てざる事實を證するに足るへし果て然れば古代の理學者と今代の理學者は道若しくは法若しくは理と力の關係を視る全く反對なるは明瞭にして力を本と立つるか是か法若しくは道若しくは理を本と立つるか是かは疑ひなきに非ざる問題なるも西洋理學の今日に發達せし順序に照して此問題の解答を求むれば之を得んこと極めて容易なるへし抑も西洋の理學はプラットか觀念説を定めて唯心論の初形を造りしとアリストトールか形物説を立て唯物論の初形を造りしとに依り一大疾歩を起し其後ニュートンデーカートよりロックカントを経ひて更に歩足を速め遂に現時の如く高慶に達したり今此發達の經歷に就て攻學の如何なる方法か最も功績を顯はせしかを觀れば物理化學生理等の諸門を別ち實驗を主とするの方針を取りて精密なる分拆の結果を統合せしに在りと謂はざるへからず果して然れば現今理學者か知らず識らず力より寧ろ(道若しくは法若しくは)理を本と立つるか如き推測の傾向を顯はすに係はらず理を末と認め力を本と認むるの見解に至りては有意識に屬し殊にスペンサーか實驗界に於ても理想界に於ても力を本と認めたるは理學の此經歷を逐ふて發達せし結果たるの外あるへからず更に他語を以て之を約言せば凡そ意識原働の成立する順序は漠然たる思想先つ起り然る後確然たる思想起るに在るを以て其確然たる思想

を確信せんには先づ其漠然たる思想を確實と假定するの必要なるより人智最弱の時代に於ては其漠然たる思想を本に立て其確然たる思想を末に立て、學を講ずるは已むへからざるの順序なるへし例ひは同の概念も差の概念も適當實驗より嚴密の見解を取れば結局少差を意味するに係らず假りに又此二概念を別視して之を對用するは思想協働の已むへからざる順序なるを以て古今なる講學上之を對用するも理學か實驗理學の初歩なる唯物論と理想理學の初歩なる唯心論に派別せし時代に於ては縱令ひ實驗理學に限るとは雖も異を本に立て同を末に立つるは常見と爲りたり然るに理學か理想と實驗を混飛せし時代に於ては却て同を本に立て異を末に立てしか如し而して理若しくは法若しくは道の力に於ける亦此の關係に在るのみ蓋し力なる語を以て表する概念は筋肉の伸縮を経験するに始まり理なる語を以て表する概念は萬物の大本若しくは心を玉の群集なりとするか如きに始まり法なる語を以て表する概念は水其性に従ふ意を推すか如きに始まり道なる語を以て表する概念は首の走方を萬物の大本と認むるか如きに始まり理學發達の初程子に於て力を末に立て理若しくは法若しくは道を本に立てたるは此中に於て最も適當實驗の起點衝に當るは力なる語を以て表せし筋肉に若しくはなしと雖も此起點衝に當る筋肉を實驗して力の概念を發達せんには理若しくは法若しくは道の概念を實驗と假定するの必要より出てたる窮策たるに過ぎざるを以て力の概念を充全にするに及んては力を本に立て理若しくは法若しくは道を末に立つるの順序と爲りたるなり果して然れば理若しくは法若しくは道は結局力と共に作用を意味するも近世の理學か曩に末に假立せし力は今之を本に實立し反して曩に本に實立せし理若しくは

法若しくは道は之を末に假立しざるは幾世を通して實驗を統合せし結果にして此經歷より觀れば實驗理學に於て現時の如く理若しくは法若しくは道を以て末に立て力を本に立つるは善く講學の順序に適ひたると謂はざるを得ず既に之を謂ふを得しとせんか若し理想學上所謂る萬物の大本を推すに實驗學上所謂る萬物の大本に命名する語を以てするを允當なりとせば理想學上所謂る萬物の大本に命するに理若しくは法若しくは道なる名を以てせず力なる名を以てするは亦自然の結果たらざるを得ざるか故に理體說法體說道體說靈力說の四說にして理想理學の最大綱に屬すとせば此四說か均しく其最大綱に屬するに係らず獨り靈力說を理想理學大乘の一乗と認むるの允當たるは太た明瞭と謂ふへし予の上卷に於て理學大乘不適當を設くるに當りスペンサーと靈力存在の説明に就て見解を異にするに係らず假りに宇宙の大本を靈力と認めたるは畢竟此邊を考察せしに依るなり

然りと雖も予の既に實驗理學適當を講了せし今に於ては予の活解を附せし靈力說も唯々理想理學亞大乘中の一乗たるに過ぎずして大乘中の一乗たるへからず其理由は他に非ず理想理學を以て實驗理學を補はんと試むるの主意は適當實驗を以て推定し能はざる事物に就き不適當實驗を以て之を説明するに在るか故に理想理學の適當基礎は適當實驗を以て推定し能はざる事物の概念寧ろ疑たらざるを得ず然るに中卷に實驗理學適當を講了せし結果を顧省せば理若しくは法若しくは道の如きは固より實驗し得て餘意を存する所あるに非ず又形色香味等の如きも之を力の固有質に歸するときは敢て餘意を存する所あらず而して力の如きは之を分合作用なりとせば實驗的の餘意は固より理想的の餘意を存する所あらず又時の

如きは空を分作用なりとする見解に相對して之を合作用なりと解釋せば更に餘意を存する所ならずと雖も獨り空に至りては時を合作用なりとする見解に相對して之を分作用なりと解釋するも動すれば吾人の考觀を惹かんとする餘意の存して已まざる者あり而して其已まざるの餘意とは上卷第二章に於て示す如く合作用と分作用の間に方廣ありと思はしめ若しくは方廣と分作用又は合作用の間に更に間隙寧ろ方廣ありと思はしめて餘意を存するの謂にして此餘意たる予の精密なる實驗理學適當を以てするも尙去り能はすして予をして遂に適當實驗界を離れて更に不適當實驗界の存在を認めしめんとして已むべからざるが故に適當實驗を離れて空の存在を認めんかスペンサーが所謂知るべき宇宙を力なりと解すると同時に知るべからざる宇宙を空と釋すべし故に理想理學適當は先づ空の存在を認むるを以て第一乗と爲し空を力と認むるや否やは亞大乘の旨趣に屬せばなり故に上卷に所謂知るべからざる宇宙を靈力が空及び時の原形に駕する状態なりとせしは結局空の存在を示さんとするに外ならざれば今や理想理學適當の大乗を講ずるに臨んで之を空界の義と訂釋せんとす蓋し空は實驗不適當より觀れば力界を離れて存在すると同時に力界普遍の一質として存在し爲めに是非とも力界の一質として認めざるを得ざるの疑あるも實驗理學適當は之を否定するが故に適當實驗を以て空の存在を推し能はざるは固より論を埃たすと雖も不適當實驗を以て其存在を認むること即ち無作動の方廣ありとすることは古今なく普く人類の意識根底を占め去らんとしては去り能はざる所なるべし例ひばカントが時及び空を思想普遍の最原形と認めたるは少くとも空が意識の根底に蟠踞して去り能はざるに依らざるべから

す又唯物論者が宇宙は唯々物質の運動なりとするの見解は先づ物質の占在する空を假定し物質の區域を分設するに依らざるべからず又ヒームが虛無説を唱ふ佛徒が本來無一物を説く暗に宇宙徹底の性質を空と認むるに依らざるべからず又老子が大極虛空を説く暗に空の存在を認むと謂はざるべからず又古今の神學が想像を以て神國を畫くは實驗界を空の外と認めて神國を空の中に在りとするを意味して而して之を畫く發端は實驗界の外に先づ空の存在を認むるに依らざるべからず故に予の講了せし實驗理學大乘の見解を離れ理學大乘不適當に還り人類考察の成立を觀察せば心は素と空より出て物も亦空より出て内外の兩界皆空より出てたりとも認むべく又此兩界共に實驗理學適當の所謂分合作用なる力より出てたりと認むべくして此二者の觀念は繼續又は連續し理學不適當の所謂時を爲して實に意識の原働たるが故に靈力觀念の如きは空源觀念か力源觀念を厭覆せしとき意識が力源觀念を以て捏造的に空源觀念を彩色せし結果たるの外なきを以てスペンサーは縱令靈力觀念を以て意識原働適の根據と認むるも予は決してスペンサーの如く之を其根據と認むる能はず若し之を疑はスペンサーが彼れの理學に於ける最終根據なる知るべき者の觀念と知るべからざる者の觀念を離存すべからずとする見解を精解せば是非自ら判明する所あるべし抑もスペンサーが知るべき者の觀念と知るべからざる者の觀念を離存すべからずとする徹底の眞意は適當實驗を以て知るべき者の觀念と否らざる者の觀念他語を以て換説せば知と疑の離存すべからざる義たるが故に此關係を以て最大理學不適當の根據とせんには其關係は最精の知と最精の疑が離存せざるの義なるを要するを以て茲に其最精知及び最精疑如何を

觀察せば前者は分合作用の概念たるは固より論を俟たされは後者は唯々空の概念あるのみ決して靈力の觀念に非ず其理由は他に非ず力と云は必ず作用を指し此語に靈なる語を冠するときは何等の作用とも指的すへからざる作用の義にして若し此等の作用を以て指目すべき者ありとせば唯々空あるに過ぎずして而して人類か靈力の假想を發するは先づ空なる觀念ありて之に假解を付するに依るを以てなり故に理想學の大乗に於ては宇宙の原体は空たるを疑ふへからざるなり

然れども反對者あり若し空の存在を理學上に於て最精疑なりとして之を宇宙の原体と認むるを得ば時も亦宇宙の原体と認めざるへからず近世理學者の時に於ける空と共に解義に苦み時の性質を解せざる者にして未だ空の性質を解せし者あらず況んやスペンサーの所見に依れば時の觀念は繼續適當を経験するに始まるも空の觀念は繼續か既に適當を失ひて共存となるに及んで起ること心理上の順序なれば先起の觀念を惹起す者は因にして後起の觀念を惹起す者は果とも謂ふべきを以て時を宇宙の原体と認めは却て空を宇宙の原体と認むるに優れとして反對を試みんか予は中卷に於て時を繼續と解し空を方廣と釋するは俗見なりとし時は之を合作用と解し空は之を分作用と解したり此意を推さば實驗理學適當に於ては時不適當は分合作用の繼續を指すを以て時は空を兼ねると謂ふも可なりと雖も理想理學適當は獨り理想學上所謂空を有常と認め分合作用を意味する時及び空は之を無常と認むるか故に若し有常を意味する時ありとせば理想理學不適當の所謂の時あるに過ぎざるを以て反對者の所謂の時を假りに此時を指すとし予は反對者に向ひ先づ問はん凡そ繼續を意識する

は直に之を経験するに依るか但しは先づ繼續の類子を経験し然る後類子前後の關係を意識するに依るかと必ずや先づ各類子を経験し然る後各類子前後の關係を経験するに依ると答ふへし果して之を反對者の時に附する見解なりとせば空を宇宙の原体と立つるは理想理學適當を講修するの目的に反するに非ずや抑も近世理學者間に於て空を時と共に解知すへからずとするは畢竟繼續の類子たる力は解知し得へきも他の類子たる空の原質に至りて解知すへからざる所あるに依るを推さは此の如き意義の時は理想理學適當の所謂宇宙の原体たる能はすして獨り空の其原体たるは殊に明明なり況んや此意義の時は空と力即ち空其自身と空の抵抗を帯ふる部分の堅に連續するの特稱なるを以て廣く空と云ば時も亦其中に在るを以て空を其原体と認むると共に時をも其原体と認むるは贅見たること太だ明瞭なり故に予は此反對ありと雖も唯々空を以て宇宙の原体と認むるは理想理學大乗の一乗に適ふの見解なりと謂はざるを得ざるへし

反對者若し攻撃の方面を轉し此意義の空をも宇宙の原質と認むるの贅見たるは予に歩を譲り凡そ理想理學適當に宇宙の原質を求むるは畢竟分合作用説を以て宇宙の見解を徹底し能はざるより實驗學上所謂宇宙を他造に歸し此造者の性質を看破するに在るを以て此造者の性質は之を有能と認めざるへからず然るに空の如きは有能とも無能とも觀念する能はす有能とも無能とも觀念し能はざる空を以て宇宙の原質と認むるは縦令ひ有能の方法を不審議に附して之を示さざるも尙ほ有能の觀念を與ふ靈力説を假りて宇宙の原質を靈力と認めて之を理想理學の第一乗と認むるに若かすとして更に反對を試みんか予の亞大乗に至り靈力

説を假り若しくは唯心論を假り此造者の性質を説かんと期するは固より此點に於て見る所ありて然り又古來理學者の概して空の存在を大乘と爲さず却て唯心說唯理說等を有意的に大理と爲せしも此點に於て見る所ありて然りと雖も理想學を講ずるに於て苟も順序を逐はんと欲せば理想中最も確實の理想を取りて先づ大乘を定めざるへからず況んや空を以て宇宙の原質と認むるときは靈力說若しくは唯心論を捏造して他造者の有能を理想するに比すれば縦令ひ茫漠の遺感なき能はずと雖も却て卓能を與ふの効用あるを得へし其理由は他に非ず宇宙を妙能の心と認むるは之を心より更に妙能の力と認むるに若かすして而して宇宙を唯々方廣と認むるときは力以上の妙能と思ざるに至るは力の如き性質の顯明せし者は空を生ずる權能なきを推知し得へきも空の如き性質の顯明せざる者は其有能を推知し能はざると同時に其無能を推知し能はざるが故に之を此造者と認むれば有限能の力を強ひて無限能と想像するより却て偉大の觀念を起さしむるを以てなり果して然れば古今理學を講ずるの學者にして有意的に空を宇宙の原質と認めたるは唯々印度數派の空論師若しくは希臘アナキシマンダスの類あるに過ぎずして智質の發達せし學者は却て之を宇宙の原質と認めざるは何故なりやは隨て起るへき問題なりと雖も予は此の如く人智の乖戾に陥りしは理論を精密にせんと欲して却て一時空を以て無と混視するが如き耶見に陥りし結果にして一たひ正路に還るときは思想の亂網自ら整正して曾て迷走依違の中に在りて綱網の結目たりしを失ひたる空の觀念は再び其結目と爲るへしと答ひんのみ故に予は空の存在に於ける觀念を以て理想學大乘適當の一乘と認むへし

第二章 空の普遍無限を論ず

耶蘇教徒は從來理學者に反抗せし餘動として今や前言を翻し耶蘇の歴史を活解して之を理想學の資料に供するを恥つ尙舊套を黒守すと雖も宗教主体の用法に就ては竊かに理學者の意見を容れて頗る改良せし所あるを以て之を佛教中最も宗教主体の進化を遂たる眞宗が彌陀寧ろ報身佛の大願に投する方法を宗教の主体と爲すに比するも尙は優る所あり然れども上帝の解は果して法身佛の解に比して絶對者の普遍無限なる觀念を與ふに於て優る所あるか當然らざるのみに非ず法身佛の解は縦令ひ茫漠とは雖も上帝の解より更に絶對者の普遍無限なる觀念を與ふ所あるは固より論を埃たす然れども法身の解も之を實體說に比すれば尙は讓る所あり實體說も亦靈力說に比すれば尙は讓る所あるは固より論を埃たす果して然れば在來開發の理學か絶對者に附する見解にして普遍無限の觀念を與ふは靈力說に若しくは無かるへし然れども靈力說も尙は此點に就ては予の空體說に讓る所なかるへからず故に此理を説明せんか爲め先づ力と空の對別に於ける實驗學上の定義を間接の參考として理想學の力と空に對する定義を説く所あらん抑も古今理學者の力を説く之を有方廣と認め尙は空中に占居すとするは其常見なるが如し例ひはデカールが心物の差別を説くに物の性質は方廣なりとして心は無方廣とし又スペンサーが物の性質は方廣と作用の二個なりとする見解の類を推さは此等の學者か力を無方廣なりとするの眞意は絶對的に無方廣と認むるに非ず唯々物に相對して無方廣と認むるの意なりと思はざるを得ず此事はボスコッチが物を唯々力の集點なりと解せしを推考せば殊に明瞭なり然れども此の如きは實驗理學適當の

見解なりと謂ふへからず。其理由は他に非す凡そ事物存在の觀念を分拆せば必ず作用と方廣の二念あるを發見すへし例ひは力の存在を知るは先つ方廣ありと疑ひて作用を信するに依るか否らざれば作用ありと疑ひて方廣を信するに依るか如し然るに眞誠の實驗理學は作用の如く直接實驗を許す者のみを存在すとし方廣なる間接實驗を意味する者の存在を否定するを其法則とするを以て作用と共に方廣を意識すへしとするは此法則に違ふ所ゆればなり故に予は曩に中卷に於て空は力の分稱にして力は空と時の總稱なりと爲し此乖戾を避けたり蓋し予の見解も亦之を皮想せば方廣も亦適當に意識すへしとするの意なきに非ざるも之を眞察せば理想學上所謂空の存在を否定するの意義自ら發露し此法則に乖戾する所あるへからず故に予の見解を實驗界に適用するときは物質の如きは分合作用か同類の集點を爲して力界に異なる一系統を爲すの義と認め又運動の如きは物体の分合作用か物体の系統を破らすして類合順序を逐ふの義と認め時の如きは不適當には分作用と合作用若しくは合作用と合作用の連續又は繼續と認むると同時に適當には合作用と認め空の如きは之を分作用と認め從來の學考か實驗理學と理想理學を混し適當の實驗を許さるる空の存在を實驗理學上に認諾するか如き乖戾に陥ること無かるへし然れども茲に予の眞誠なる實驗理學も尙ほ之を充分ならずとし理想理學適當を以て之を補ふの必要を認め此學を講ずるに及んては先づ理學不適當に還り力と空の意義如何を觀察するを要するか故に理學不適當に就て之を觀察せんか力は方廣と作用を兼ねる者と認めて從來の實驗學者か誤つて暗に是認せし力の見解に依ること却て允當なるを以て此見解に依り力を觀察せば空と力の間に絶對の差別なきを

以て空の存する所は力も亦存し執れか有限にして執れか無限なりや之を視別すへからざるに似たれども進んで疑を疑らすときは空と力の間に亦空の存在を認め力の有限にして空の無限なるを認めざるを得ず然れども靈力説の所謂靈力は實驗理學上所謂力と異なる所の力を指すの義なれば靈力と空の執れか普遍無限の觀念を與ふかを觀察せんには更に所謂靈力の定義を想定して比較を施さるへからざるなり

抑も靈力説の所謂靈力とは宗教家の説く所の奇變其れ自身を指すの義に非す又所謂奇變を起すへき力を指すの義に非す又分作用を意味するに似て分作用を意味せず合作用を意味するに似て合作用を意味せず方法の不明なる絶大偉能の作用を指すの義たるは此説を主張せしスペンサーが此力の存在を證明せんとせし論意を推して明瞭なり果して然れば理想理學亞大乘に至り空を分拆統合して靈力の存在を認めざるへからざるか如く假りに茲に靈力の存在を認めんか此力の卓絶偉大なる作用たるは固より論を埃たす隨て普遍無限の觀念を與ふへーケルか宇宙を唯心の化現なりと説きしより更に確實なるも亦固より論を埃たす然れども既に力と云は之を縦合ひ分若しくは合を意味せず全く人類の實驗すへからざるか法の力なりと假定するも作用の意義を離るへからず且つ力と空を別視せざるへうらざるか故に靈力の存在する所は方廣も亦存在するの觀念あるのみに非す力の存在せざる所にも尙得空の存作を認めざるへからざるはスペンサーの所謂知るへき力と空に於ける關係に異なる所なかるへし然れども氏か空を靈力の或る存法なりと解せし點より觀れば氏の靈力は氏は空の存在せざる所にも亦存在すと認むるの見解なりと思ふべからざるに非ざるが故に假り

に此見解に従ひ空の存在せざる所に靈力の存在を認めんと試みんか若し空の存在せざる所ありとせば空の存在せざる所とは即ち無方廣を指すに外ならずして而して無方廣の如きは實驗理學適當は其存在を許すも理想理學適當は唯々假存を許して實存を許さざるか故に空の存在せざる所に就ては毫も理想の起るべきなし然るに空の存在に對する觀念は靈力を存在すと思想すると同時に靈力の存在せざる所にも空の靈力と相接して存在することを意味して已まざるへし靈力説に於ける普遍無限の一點に就て觀念を與ふ効能に劣る所ある既に此の如しとせば唯心説は固より實體説の此點に於て空體説に劣るは敢て之を説明するの必要なしと謂ふべくして而して近世實體説を唱ふの學者か動すれば攻撃を受けて學界より却退しロエームの徒をして現象亦實なりと認めしめたるは空體説を理想理學の大乗と認めさす直に實體説に入り實體の普遍無限なる觀念を確實ならしむるの順序を竭さざるの結果なるへし

印度理學の如きは理想理學の一方に於ては上卷に於て西洋の理想理學に優るが如き意を假定せし所ありと雖も實を云は其粗野にして西洋の理想理學に及さる遠しと謂ふを得べきを以て西洋の理想理學を參觀すると同時に此理學を參觀せば紹貂の非難を受くるなきも知るへからすと雖も正見と耶見を對比して參觀するは兩端を盡くすの方法にして予の理想理學をして完全ならしめんと欲せば茲に之を參觀するも亦已むへからざるのみ印度前期の理學時代に於て無の實在を唱ふ愚者あり佛徒より之を觀れば外道を以て前期理學を認むるの結果として之を呵責して措かざるへしと雖も佛徒が理想理學と實驗理學を混同するの結果と

して有宗空宗中宗の三派を爲せしを觀れば佛徒の中にも亦無の實在を信するの愚者ありと謂はざるへからすと然れども佛徒が無の實在を信するの底意は巴羅門教徒が暗に空の實在を信すると一般と謂はんより寧ろ一層厚く空の實在を信するの義なるへし凡そ有無は反對にして力界を有と定むれば空界を無と認め空界を有と定むれば力界を無と認むるは意識第一着の順序なるを以て理學不適當に於ては有無の二義を此兩界に通用するも既に意識第一着の順序を去り實驗理學適當と理想理學適當を分設するに及んては實驗理學適當は唯々力界を有と認め空界は必ず無と認むは此第一着の順序を修正する方法にして有無の二義は必ず之を偏有せざるへからすと左れば佛徒の或る者が有宗を否定して空宗を立て他の者が空宗を否定して中宗を立てるの順序は理想學に依り實驗學に於て前に有と立てたる力界を無と認め却て空界を有と認め然る後空界を眞如の法体と定むるの精神なるを以て此徒が予の實大乘と認むる者を却て小乗と認め予の假大乘と認むる者を却て實大乘の如く認むるは此精神に反すること太た明瞭なり然れども此事の詳論は本章に必要な關係なきを以て姑く之を措き此徒が實大乘と認むる眞如法体の觀念は予が空體説の如く普遍無限の觀念を與ふや否を觀察する所わらん抑も佛徒が眞如法體説を立つるも亦空の實在を認むるに依るとは雖も法を以て却て空より普遍無限の如く示さんとするは彼れが方隅無邊説を立つるの疎漏なるに依らざるへかす而して此説を立つるの要意を觀るに十方虚空を認むると同時に彼れか空算法の記號を以て物質を分解するも尙は物質消滅の理を解得する能はざるより物質と虚空の兩存を認め有色即是空有

空即是色の如き若しくは空非有量空非無量の如き錯戾の論法を立て物界の盡くる所に空界
 有り空界の盡くる所に物界ありとして遂に方隅無邊と認めしか如し故に彼れか眞如の法体
 を以て物界空界に遍満すと認むるは方隅無邊説を立つる論理の錯亂より起る自然の結果と
 謂ふべきを以て彼れ佛徒と雖も西洋の理學を研究し然る後予の理學を參觀し自家固有の
 學文を再閲せば所謂有空中の三宗を廢して上帝説を實行するの得策たるを氣付くと同時
 に空の普遍無限を明知すべきなり

更に支那學者の見解に徴して空の普遍無限を證明せんか老子が大極は名くべきの名なきも
 強ひて名を與ふれば道なりと決せしは暗に理想學亞大乘を立るの目的にして彼れが之を決
 するの前に當り大極は無極なりとせしは佛徒の方隅無邊なる語を用しと一般に語用の撞着
 を免るへからすと雖も暗に理想學の大乗を立つるの目的に出で虚空の普遍無限を認むる
 者と謂ふへし果して然れば空の普遍無限は人類の表意若しくは裏意に於て一般に認めて疑
 はざる所なれば古今の學者が宇宙の大源を平等無差にして且つ絶對なりとする極意の一端
 は空を普遍無限と認むるの意なるへし

第四章 空の無始無終を論ず

空を無始無終なりとするは之を絶對無限なりとすると同義なるも本章を設くるは所見の點
 を變して更に空の絶對無限を顯明にせんと欲するのみ抑も耶蘇教徒が上帝は無始無始なり
 と説くの意は上帝は頭もなく足もなく髪もなく尾もなく且つ働作に吾人の知り得べき順序
 なきの義か固より此等の義にも解せざるへからざるも其主とする所は上帝の存在は絶對的

に始終なきの義と認めざるへからず然るに耶蘇教徒の之を説く方法たる管々理想學を講
 する順序を踏まざるのみに非ず動すれば妄誕附會を混する歴史を援引し急激の手段に依る
 を以て西洋の理學者にも唾棄を蒙る程なれば佛徒の非難を受け之をして改宗せしむるの好
 運に接せざるは怪むに足らざるなり然れども耶蘇教徒が果して佛徒を變宗せしむるの手段
 を誤るや否やを觀察するは之を措き耶徒が上帝を無始無終なりとするの主意か佛徒の耶徒
 を非難するの理由に優る所以を觀察せん抑も佛徒か宗教主体を行ふの方法太た曖昧に屬し
 一定せざるが故に時としては釋迦を紹介者に頼み時としては彌陀を紹介者に頼に時として
 は彌陀は獄囚を去る遠からずとして耶蘇の如き者を紹介者に頼み其方法を異にするも結局
 主義とする所は所謂法身に接情せんとするに外ならず面して其法身に對する見解如何を
 觀察せば種々の乖戾なる觀念を意味するも其主要とする所はダーウヰンが自然と認むる法
 則團塊の如き者に因果理の名を附し種々の妄像を畫くに在り而して佛徒か耶徒を攻撃する
 の唯一手段は此因果法たるのみ而して此因果法を手段として耶徒を攻撃するの理由を聽か
 ば耶蘇は上帝を宇宙の大本と立つるも上帝は想像物なり我徒は物界にも理界にも普通する
 實驗的の因果法を幾千年前に印度に恰も黒烟天に漲るか如く萬丈千尺の黒体を以て顯出せ
 し如來より授けられたるを以て此理法に拜願せず彼の想像物を信仰するときは先つ如來の
 恩惠に背くの恐れあり且つ彼の想像物は此理法を推して捏造せし者なるに外ならざるを以
 て本を捨て末に就くの害あり故に我徒は耶徒の教旨を肯して改宗せざるのみに非ず却て耶
 徒をして我徒の教旨に従はしめざるへからず我徒は宿世の因縁に依り曾て巴羅門教徒を外

道と認め之を改宗するを務め功績既に成り既に一人の巴羅門教を信する者ならず故に今や此教を外道と認むるは名ありて實なきを以て更に耶蘇教を外道と認め耶徒が回教を外道と認むるの悪報若しくは善報を彼れに與ひて如來の恩恵を報するは此時を捨て得へからずとするに在りて而して此因果法を手段として耶徒を攻撃する方法を觀れば上帝を宇宙の根源と立つるときは先づ絶対因果の理を假定せざるへからざるも之を假定するは實驗之を許さず然るに我徒の因果理に依れば因と果は前者後者を指す義にして茲に因と爲る者は彼に果と爲り彼に果と爲る者は茲に因と爲り前者後者は恰も念珠を繰回すとき大なる珠か小なる珠を逐ふと同時に小なる珠か大なる珠を逐ふ如く始終循環止むなしとするを以て之を宇宙の順序と立つるか故に此因果法に依り宇宙の存在を無始無終と認むるときは善く實驗に適ふを以て彼の絶対因果説を以て成立する上帝説を去て此相對因果説に就かしめんとするに在るか如し然れども佛徒の此無始無終説か耶徒の上帝を無始無終なりとするの見解に及ばざるは太に明瞭なり

曾て論理學者の大家を以て知られたるハミルトンか所謂因果の理を解せんに先づ絶対の始終あるを悟らざるへからず然れども宇宙の物を觀れば前なる者の前には更に前なる者あり後なる者の後には更に後なる者あり絶対の始終は之を知り能はず既に之を知り能はるか故に始終は相對にして絶対には非ず始終既に相對にして絶対には非ずとせば所謂因果理は前者後者の繼續なりと断定せざるへからずと爲せし論法を是なりとせば佛徒か無始無終の見解も非ならずと認めて可なり然れどもハミルトンの如く論理學に理想實驗の二種あるを

認めざる論理學者の論理法は眞の論理法に非す既にハミルトンの論理法をして眞の論理法に非すとせば耶徒の無始無終に對する解義を是認せざるハミルトンをして佛徒の無始無終を辯護せしむるも佛徒をして耶徒に勝たしむること能はざるへし凡そ無始無終は有始有終と相對にして一方に相對的の有始有終を觀念せんには他方に相對的の無始無終を觀念するを要するは固より論を俟たすと雖も相對的の無始無終と有始有終を觀念すると同時に絕對的の無始無終と有始有終を觀念するを要するも亦事實なり而して相對的絕對的の無始無終と有始無終は實驗理學の用語にして分合作用を自存と認むるか如きは無始無終に屬し分合作用の結構せる諸系統を結果と認むるか如きは有始無終に屬するの類を指し絕對的絕對的無始無終と有始有終は理想理學の用語にして空を無限と認むるか如きは絕對的絕對に屬し反して有始有終は之を分合作用か空より生せし刹那に空に歸するの義なりと予は解せざるを得ず果して然れば實驗理學に於ても宇宙の因は之を無始無終と認め結果は之を有始有終と認むへく又理想理學に於ても宇宙の因は之を絕對的絕對に無始無終と認め果は之を絕對的絕對に有始有終と認むくしてハミルトンの如く所謂因果理の意味する無始無終を理會すへからずとするは實驗理學に於ても理想理學に於て許さざるは明瞭にして隨て佛徒か因果理に附する無始無終の見解も謬妄たるは明瞭なりと謂はざるへからず然れども佛徒は分合作用の全体を無始無終と認めて之を絕對の因と認むるの一義は我法類の意に投合するも分合作用の各自に就て因果の理を研究せざるは此理を説て之を詳かにせざるの俗見なりとせんか予は實驗理學を講了する曉に於て理想理學を講明せんとするの必要は此等缺點の實

驗理學に存するの結果なりと答ひんのみ若し又佛徒にして所謂因果理の所見を變し我徒の因果理を説くの目的は之を實驗界に適用するより寧ろ理想界に適用するを主とするの義にして之を耶徒か上帝を無始無終の因と認むるに比すれば理想的因果理として大に優る所ありと云はんか佛徒か理其れ自身を力と認むるの是非如何は既に第二章に於て明瞭なるか故に予は唯々耶徒か上帝を無始無終の因と認め分合作用を有始有終と認むるは因果理の大綱を示すの目的にして分合作用の各自に於ける相對因果理の存在を認むることも亦其中に於て意味すと答ひんのみ若し佛徒にして之を拜肯せば耶徒か上帝を無始無終と認むるを以て之を卓見とし推尊せんこと當然なるへし

果して然れば耶徒か上帝を無始無終なりとする見解は吾人に聖明の觀念を興ふが抑も上帝とは何ぞや唯一神の發明者なるソクレテスの所見に依れば神は一にして多なるへからず若し之を多なるへしとせんか其多なるべき神は偏能の相對者たらざるべからず偏能の相對者は如何に夥多相依るも全能たるの結果を生ずる能はず其理由は他に非ず神は部分に於ても全体に於ても優劣無差の全能なる一体なりとせば前未整正の觀念に達すべしと雖も神を多種なりとせば其多は無限の多を意味すとすも偏能者の無限數は偏能の無限數を意味し且つ各能は相縁相接するの順序あるを要するを以て無限數偏能者の外に此順序の全体を知悉する全能者を假定するの必要なるに依り到底前後乖戾の觀念を免れ能はざるを以てなり左れば之を上帝説の初形なりとしてハミルトンの批評を求めんか凡そ存在を知るは全と全の差別并に部分の差別即ち部分の差別あるを要するを以て部分の差別なしとするは存在なし

と云ふと同義なりとして神体唯一説か吾人に理會を興ひ能はざるを證示すべし更に進んで神質如何の問題に涉りソクレテス以後唯一説を唱ふプラトトを始めとし耶蘇等に就て意見を求むれば神質は智の輔佐を要せざる純正無耶の意理なりと答ふとして釋迦若しくはハウエルの批評を求めんか意は絶對的に飽くことを知らざる盲者なるか故に若し絶對全能の上帝ありとせば其質は之を意と認めんより寧ろ知と認めんこと允當なりと答ふべしと思はざるを得ず然れども心理學上所謂適當知は意に依らざれば成立する能はざるを以て神の質を知と認めんことは理想理學の間接證左なる實驗理學の禁する所なるを以て此等學者の所見を叩くも唯一説か神質の理會を興ざるは明瞭と謂ふべし然れども神質如何の精察は姑く之れを措き神か世界を創造せし理に就て試に釋迦に唯一説の眞意と推さしめんか釋迦は得意の色を露し若しソクレテスの説く如く上帝を存在すとせば上帝の宇宙を創造せし順序は其絶對全能なる各部の執れかは詳かに之を知らざるも或る部分か誤つて煩腦の病を發し強欲を逞ふせしより失明に陥り失明は其部分に取りては墜落の因と爲り他部に取りては墜落の縁と爲り遂に獄屋同様の現世界を現出せしとして之を唯一説の宇宙創造に於ける見解と認むるべし然れども此の如き解釋は理會を興ひざるのみに非ず文明人は之を口にすをも恥つるが故に視るに足らずとしてシェリング若しくはヘーケルの徒に解釋を求めんかエシリングは上帝なる絶對の意志が意味する理性が伸縮の二種作用を露し此二種作用の順序を逐ふに従ひ先つ心界を造り心界を結構する伸縮の二種作用は更に順序を逐ふて伸縮するに従ひ或る者は物界を造り此兩界の伸縮作用が相互に順序を逐ひ交換する結果は遂に現世界

を創造せしと解釋すへし反してヘーケルは上帝の意志が意味する理想が化現して先づ物界を造り物界を結構せし理想は遂に再化して心界を造りしこと上帝が宇宙を創造せし沿革なりと解釋すへし此二説を觀れば物心兩界の成立順序に就て全く所見を異にすと雖も此事の是非は姑く之を措き共に物質と心質の間に絶對の差別を設けざるが故に間接證左なる實驗理學の旨趣に違ふを以て亦唯一説の宇宙創造に於ける眞意を明示するに足らざるなり果して然れば唯一説は上帝の唯一体あること及び其性質の絶對全能の意志なることに就て充全の理會を與ひざるは固より宇宙創造の順序をも徹底に了會をせしめざるも亦明瞭なりと認め得べきを以て上帝説も亦宇宙太源の無始無終を明示せざるは推して知るべし左れば上帝説に更ゆるに靈力説を以てして此説が宇宙太源の無始無終に就き理會を與ふや否やを觀察せんか所謂の靈力は表面より觀れば全能とも不全能とも見定むべからすと雖之を絶對の靈力とせば部分に於ても全体に於ても之を絶對全能と認め易きこと上帝説に優り且つ此力が宇宙を創造するの順序を説明するに予の分合作用説を以てするときは上帝説に參觀するにヘーゲル等の見解を以てするに優るが故に其力の存在に就て無始無終の觀念を與ふことも亦隨て上帝説に優るも此説に於て其力の作用法を示指せざるに係らす苟も作用と云ば先起後廢の順序を意味するを以て其力の各部に於ける存在に前後の觀念を起さしむるが故に此説が宇宙太源の無始無終に就て觀念を與ふ佛徒の因果説に優るも尙ほ之を去る遠からざるの遺憾なきに非ざるべし果して然れば空體説を以て宇宙太源の無始無終を觀念せんか始めて吾人の智能が許す限り完全の理會を得へきなり

抑も無始無終とは世俗の所見に依れば理想理學に於ても實驗理學に於ても時即ち繼續の始終なきを指すの義なるが如しと雖も直接實驗と間接實驗を兩用して觀念する時の如き者に就ては理想上存在の始終なきを理會せんこと決して得へからず例ひは予の分合作用全体を自存と認めたるは實驗理學適當を離れざる限りは完全の見解なるへしと雖も此説を理想理學の領内に擔來して之を詮議するときは此無限種分合作用に眞數性質及び類合順序を意味するが爲め此作用の自存を認めんとするも得る所の觀念は釋迦が宇宙の事物を算し得へき少數と認めて定めたる輪環説が自存を意味する所に比すれば幾萬倍の高等に位するに係らす絶對的絶對に無始無終を意味せざるが如し然れども空の存在に至りては則ち然らす空の性質たる唯々方廣の一義にして東西南北の標準もなければ高下上下の標準もなく豎横表裏の標準もなければ強弱大小の標準もなく如何なる點より觀察するも毫も界限の念片を起さずして唯々絶對的絶對の無限を想念せしむるの之絶對的絶對の無限とは則ち無始無終の本義にして吾人をして此本義を全ふせしむる空こそ眞に絶對的絶對に無始無終の存在と謂へし然れども反對者あり存在とは主觀が客觀を分合する結果にして主觀の此結果に達するは同時に達するに非ず必ず之を達するの順序なかるへからず而して之を達するの順序とは主觀か意味する空の一部か主觀的客觀并に客觀的客觀の意味する空の他部を分合するの謂にして之を汎稱せば所謂の意識と稱する者是れなり故に時の觀念先つ起りて而して空の觀念起るは意識が此順序に従はざるへからざるに依るなり然れば意識が眞に我れありと知るは我れと物を分ち彼我の差別を立つるに依るとは雖も物と我は同時に存在すと認むへからず

シュリングの如きは心先つありて而して物ありと云ひヘーケルの如きは物先つありて而して心ありと云ひ心物存在の前後に就ては諸家各々其見解を異にすと雖も物ありて而して心ありと思ふを以て意識の順序なりとせば物を顯すの空ありて後心を顯すの空ありと謂はざるへからず又心ありて而して物ありと思ふを以て意識の順序なりとせば心を顯す空ありて後物を顯すの空ありと謂はざるへからず既に之を謂ふを得へしとせば空に先存後存の部分あること明瞭にして此理を推せば空とは結局時の恰も玉の理が回走して一團を爲す如く豎横十字に回接するの義たるに外ならざるを以て空を無始無終なりとするの極意は輪環説か宇宙の本源を無始無終なりとするに異なる所なしと云はんか此見解の如きは實驗理學も理想理學も混同する佛徒の如き不開なる思想者の見解のみ予は中卷に於て宇宙の原質を分合作用と認め其分合作用は之を自存と認め而して實驗理學の所謂空の原形は分合作用を指すの義にして時の原形は合作用を指すの義たるを述ひたり此意を推して考ふれば實驗理學か理想理學を否定する限り時を繼續と解し空を方廣と釋するは大同小異の文字を以て妄像を表するに過ぎずとし之を常識と認めんこと明瞭なり左れば實驗理學の相對的存在即ち有は内界合作用か外界合作用を合すること若しくは外界合作用か外界合作用を合すること若しくは相對的無存在は内界合作用か外界合作用と分れること若しくは外界合作用か外界合作用と分れることの義たると亦明瞭なり然れども理想理學は亦實驗理學を否定するを以て實驗理學の空及び時に對する學見を常識と認め却て實驗理學の常識と認むる時及び空の解釋は之を學識と認むるか故に其不適當に於ては時として時を力と空の繼續と認め時を全と爲し

却て空を分と爲すことあるは猶ほ實驗理學不適當大乘に於て却て空を全と爲すことあるに異ならずと雖も概して空を全と爲すの傾向の多きは亦實驗理學不適當大乘に於て時を全と爲す傾向の多きに異ならず而して其理由は他に非ずスペンサーの所見に依れば意識原働は靈力と可知力の二概念より成立するも予は意識最終の原働は之を内界の分合作用と認むる所見あるのみに非ず意識適當の原働は力ありと思ひは空ありと疑へ反して空ありと疑ひは力ありと知ること即ち力の概念か主と爲り空の概念従と爲り此二概念か萬般思想の骨髓と爲りて働くこと直接即ち適當に力を經驗すると同時に間接即ち不適當に空を經驗するの意識作用と認むるの所見なるを以て意識適當の原働か不適當部に於て時を全と知り若しくは空を全と知るか如きは靈力を全と思ひ所謂可知力を全と思ふと一般に適當意識原働の變形にして常形は唯々力ありと知ると同時に空あると疑ふの外なかるへければなり果て然れば實驗理學か轉迷して意識原働の右足なる力の概念を布衍して其適當に入り直接實驗上に於て力を絶對的絶對に存在すと立つれば理想理學の開悟して意識原働の左足なる空の概念を布衍して空の存在を假定するも亦當然なるか故に其適當に於て所謂存在の絶對的絶對なる眞義は唯空を指すの一義あるのみ此事は老子か宇宙の本源を虚即無と認めカントか宇宙の本源を實と認めたる相違を生せし理由を一考せば明瞭なるへし老子のカントに於ける釋迦かカントに於けると一般に小兒と大人の相違あるか故に老子か實驗理學と理想理學を混同せしは怪むに足らちるもカントも尙得之を混同するの盲者たるを免れざるは中就く彼れか神の存在に於ける學理的の正解は成立すへからずと斷言せし事を推し知るへしと雖も彼

れは老子が實驗理學適當に於て宇宙の大源を意識し能はざるより遂に之を有るか如く又無
 きか如く依違不斷に流れつゝ之を虚と認めたるの覆轍に陥らす之を實と認めたるは現象を
 出沒無常と認むると同時に神寧ろ彼れか所謂の實體を永久不變と假定せしに依らざるへか
 らす而て彼れか之を假定せし順序は縦令ひ彼れに於ては有意的に之を意識せずと雖も先天
 家の所謂の直覺行動の順序ならずして現象か意味する力適當と時及ひ空の三質に就き不適
 當實驗に依り先づ此三質中の最も偏質なる作用適當を除去し然る後時及ひ空の二質に就き
 獨り時の或る部分か意味する前後長短始終なる偏質を除去し時か空と共有する通質を空と
 統合せしに在るは明瞭にして通俗の語を以て之を云はスペンサーか人類の靈力を觀念する
 は琴の各部を統合するに依ると爲せしと一般に宇宙の各部を統合するの順序に外ならずと
 謂ふも可なり故にカントの宇宙の大源として理想理學適當に於て適當に理會する者は心か
 將た空かと問は必ず空なりと答ひんと疑ふへからざるを以て彼れか實體を永存不變なりと
 推見せし極意は空を無始無終なりとする義にしてカントか老子と見解を異にせしも偶々存
 在の絶對的絶對なる眞義か空の無始無終たるを證明するに足れり又此一事はスペンサーか
 實驗理學と理想理學を混同せしか爲め靈力の無始無終を意識し能はざるより現象を靈力に
 比較して尙ほ存在の意義あるか如く誤想せし理由を一考せば更に明瞭なるへしスペンサー
 か存在の意義とする所を聴くに存在とは結局客觀か主觀を意識して止まざるを眞義とする
 のみ故に人類は意識か鎖の如く連絡して存在寧ろ彼れか存在に附する精密の意義を云ば事
 物の沿革は徹底の極義に至りては之を知り能はざるも靈力を間接と雖も意識して止まざる

上は之を存在すと認めざるを得ず而して之を認むるは人性の自然に出て若し之を無存在と
 認むるときは意識の本城は陥没して意識の軍隊は個々相分れて統一を失ひ狂亂に陥り更に
 爲す所を得へからず故に靈力存在の觀念は意識の本城にして可知力的の諸意識なる軍兵は
 此本城を看失せざる限りは正列して隊を成し協働を誤たざるへし故に意識か可知力を存在
 すと思ふは靈力存在の觀念か之を命令するに依るを以て靈力を意識して止まざる限りは可
 知力を意識して止まざるへし又可知力を意識して止まざる限りは靈力を意識して止まざる
 へし故に可知力を存在すとすの意は靈力を存在すとすの義にして永久を意味すること
 其要意なるか如し而して予のスペンサーに問はざるを得ざるの要意は事物の沿革とは氏の
 所謂の可知界に於ける事物の沿革を指すの義か將た所謂の不可知界に於ける事物の沿革を
 指すの義かを決するに在るを以て之を問ば氏は兩界の沿革を指すと答ふこと氏が存在の眞
 義とする所を推して明瞭なりと思はざるを得ず然れば吾人は果て宇宙の沿革を知り能はさ
 るか予の中卷を回察せば分合作用の類合順序を以て宇宙の沿革も認め得へきを以て堅横に
 沿革の充分なる理會を得るに非ずや然れども中卷を去り本卷に入るに及んで全く宇宙の沿
 革を知り能はざるは理想理學適當に依り分合作用を分拆して普通の成分を統合するとき
 空の一体となりて更に沿革を見ざるは空か無始無終なるに依るを以て之を見ざるは空を無
 始無終として知る所以に非ずや而して之を無始無終として知る限りは靈力は之を有始有終
 として認むへからざるに非ずや然れども予は老子の流を酌むに近き虚無黨の如く空を無と
 認めざるか故に理想理學亞大乘に入るに及んては空を分合統合して順を逐ひ所謂の靈力も

唯心家の所謂る心等も無始無終なりと假定するの見込なるも此見込を確定する最大基礎なる理想理學適當大乘を講ずるに當りては先づ空を無始無終なりと假定せざるべからざるに非ずや然れば存在には實驗理學適當と理想理學適當の二義あり而して實驗理學上存在の眞義は内外界の合作用か豎横に限りなく連續するの意にして理想理學適當存在の眞義は方廣か前後左右の差別なく連續するの義なるを以て前の眞義は後の眞義を否定するに依りて成り後の眞義は前の眞義を否定するに依りて成るは明瞭なるか故に氏の如く此區別を爲さざるのみに非ず之を同意の如く認めて現象の存在を認むると同時に實體の存在を認めんとするか如きは理學不適當に於てするの外は乖戾なる見解なるも氏は氏の所謂る理學適當に於て之を爲せしは其の謬見たる知るべし然れども氏か可知力を凝存すと認めざるを得ざる時は從來の物理学家か動力消滅せば靜力と爲りて存在すと認めたと一般に空の存在は無始無終なりとするの正意に歸せざるべからず然ればスペンサーか存在の意義に間接實驗的と直接實驗的の差別を立てず之を誤解せしは偶々空の無始無終なるを證明する者と謂ふべし今此二個の謬見を分拆統合せし結果を推して考れば釋迦の如く空の小觀念を以て宇宙を空なりと認むる俗人の見解に於ては空も亦法を意味し法も亦空を意味するが如き思を起し彼れの所謂る因果法寧ろ輪環説か示す如く理學不適當の意味する時の解に依り宇宙を解釋するに止まるを以て宇宙を玉の木目が亂走狂奔して一團を爲すか如く認むるより終にセエリング等の所見とヘーケル等の所見を兩存せしむる能はざると雖も予か前に示す如く空の最大最純なる觀念に至りては毫も反對者の迷ふ如き惑を起す所あるべからず故に予は此反對者

ありと雖も理想理學適當大乘の絶對的絶對なる無始無終の眞義は空の無始無終を指すの外なしと謂はんのみ又反對者あり絶對的絶對の無始無終も亦絶對的絶對の有始有終に相對するの語たらざるを得ず左れば空を絶對的絶對に無始無終なりとするの他方に絶對的絶對に有始有終と認むべき者なかるべからざるを以て茲に汝の分合作用説を假り來つて分合作用を絶對的絶對に有始有終と認めんか分合作用は如何に細微と雖も尙ほ方廣の片碎を意味するが故に此方廣の片碎を前後左右に追尋するときは或るは僕を更ひ或るは主を更へて歸結する所なく我を始と認むるときは彼れを終と認むるも我れ彼れを終と認むるは之を認むるの事情あるに依りてせば彼れ我れを終と認むるの事情あるときは彼れ亦彼れを始と認めて我を終と認めざるを得ずして之を追尋するの極は釋迦の因果理か意味する無始無終の觀念を經ひて終に汝の無始無終なる觀念に至るを以て無始無終と認むる者も空にして有始有終と認むる者も亦空たるに外なきに依り絶對的絶對の存在ありとするは莊子輩の如き愚人の見解に近しと云はんか之を反駁すべき旨意たる亦緊要に屬するを以て項を更めて之を辨明する所あらんとす

回教徒が人性破壊説を唱ひて耶徒の小慾保性説に反對する要意を考ふに人性の人性として認むべき所は唯々現世の如く慾を満たすも害を受け満たさざるも亦害を受くるが如き不全の性あるのみ若し耶徒が佛徒と共に此性を附性と認め別に本性ありと爲す如く此性の外に他に本性ありとするも附性を捨て本性のみを保存せんに先づ宿世の惡縁を絶たんが爲め附性を破滅するに非ざれば本性のみに至り能はず而して附性を破滅する方法は慾を禁す

るか否らざれば慾を肆にするの二途あるに過ぎず果して然れば耶徒が佛徒と共に小欲保性説を唱ふの極意は禁慾を附性破壊の手段に立つるも吾れは却て恣慾を附性破壊の適當手段と信するを以て之を手段に取て耶徒若しくは佛徒より更に偉功を立てんとするに在るが如し此要意を推さは獨り回教徒のみに非ず世界の宗教家は附性と共に暗に本性あるを許すは明瞭なりと雖も附性の由來を尋ねれば縦令善惡の二魔を設けて因果説を牽強附會するも到底本性に歸せざるを得ず果して然れば所謂本性は之を假に絶對的絶對に無終無始なりと立つれば所謂附性は之を絶對的絶對に有始有終と立るは世界の理想學者が擧げて異論なきも亦明瞭なり左れば此所掲の旨趣に依れば絶對的絶對に無始無終と認むる者と有始有終と認むる者は一にして二ならざるが如き粗見に陥り一方に無終無始を肯定するも同時に他方に**有始有終**を否定するに至るとあるへしと雖も茲に予の分合作用説を携ひ來り理想學の所謂空を絶對的絶對に無始無終と認むるに對して理想學上より分合作用を絶對的絶對に有始有終と認むるときは決して此の如き撞着に陥るの恐あるへからず其理由は他に非ず實驗理學適當に於て分合作用を分合作用として認むるの眞義は全く方廣を缺きたる二種の働さを指し實驗理學適當大乘及び内界理學外界理學の兩大乘を除く以下の實驗理學に於て物体に方廣を附するが如き場合に於て方廣の觀念を適用するは理想學より一時假用するに過ぎざるは猶ほ同とは空を指すの義にして同の眞義は唯々理想學適當大乘に於てのみ知るへき語なるも之を實驗理學適當に假用し又理若しくは法の眞義は唯々理想學に於て觀るへき語なるも之を實驗理學に假用するに異ならざれば分合作用の眞義は之を全く方

廣を缺きたる働と認めざるを得ざるを以て理想理學適當大乘に於ては空を唯々方廣として認めて他に何等の性質を認め能はざるより實驗理學適當の大乘に於て分合作用と認むる者が方廣の中に於て如何なる性質を以て存在するかは知り能はずと雖も空を唯々方廣として宇宙の原体と認むる限りは分合作用は之を無方廣の作用として認めざるへからざるが故に分合作用を果と立て空を因と立つるに於て全く之を別視するの當然なるは固より論を俟たざるを以て一方に空を絶對的絶對に無始無終と認むると同時に他方に分合作用を絶對的絶對に有始有終と認むるの當然なる亦論なきのみ而て此點より觀察し分合作用が絶對的絶對に空より出て空に還るの最も親易き事實は眼覺の間に於て我の境界を異にするを推して知るへしと謂ふも可なり然れども予の見解か此點に於て稍々莊子が覺ての我れと夢の我れと我れに二あるに非ず唯々境を易ゆるのみと爲す見解に似たるを以て予の見解を莊子の如き不學の見解に近しとするは猶ほ予が空に對する見解を釋迦に近しとすると一般に予を誣ゆるの言なるのみ故に予は此反對者ありと雖も尙ほ空の無始無終たるを信するのみに非ず之を信するの見解に至りては古今の學說に優る所ありと謂はんのみ

第五章 空の純同無差を論ず

ルソーか平等説を唱ひしや差等説の餘弊を矯正する一點に就ては全世界に利益を與ひたるは疑ふへからずと雖も此説の此如き大益を與へたるは人類が差等説を誤解せしより至大の弊害を生せしに依らざるへからず若し人類にして差等説を誤解せしに非さればルソーの如き平等説を唱ひざるへし若し之を唱ふも害を與ひざる代りに益も亦與へざるへし果て

然れば差等説か實驗に屬し平等説か理想に屬するは推して知るに足れり抑もルソーの平等説を唱ひし以來此説を唱へし學者少からずと雖も最も學識を奮つて此説を唱ふはスペンサーに若くはなし而して氏の所見に依れば平等とは所謂の正の本義なるを以て平等の概念は人類の開不開を問はず人類の意識を占め暫くも離れずして平等を以て正の本義とするか如し然れども實驗理學適當の所謂の正は唯々少差を意味して平等の義ならざるは上卷に於て開述せし所を推して明瞭なるか故に此等學者の平等説を唱ふは理想理學を主とする耶徒の平等説を誤解せし結果なりと謂はざるへからず故に平等説の眞意を解知せんか爲め耶徒の平等説に就て其眞意如何を觀察せんか耶徒の説く所に依れば上帝の人類を製造する輕重の別を立てず厚薄の差を爲さず各自均等を旨と爲すに在りとして而して人類を平等無差と認むるを以て主とするは明瞭なるか故に此見解の卑野なる度合如何は姑く之を措き唯心大乘より靈力大乘に遷り靈力大乘より理想理學適當大乘に遷り此見解の極意を探れば釋迦か眞如を平等無差なりと爲せし見解の極意と一般に空を平等無差なりとする見解に歸せざるを得ず左ればルソーを始めスペンサーの徒か自ら實驗學者なりと信して所謂の平等説を唱ふも其の極意は直接實驗を許さざる空を平等無差なりとするの義たるに外ならざるへし

果して然れば此等の學者か平等説を唱ひて差等説に反對し敗衄を蒙むるに係らず尙ほ再興を謀らんとするは理想理學の本礎を實驗理學の本基に混すること其主因たるは固より論を竣たすと雖も差等の概念か意識原働の右足なる力の概念に屬して相離れざると同時に平等の概念か意識原働の左足なる空の概念に屬して相離れざると其支因たるは明瞭なるか故に此主支の両因を絶たんか爲め先づ力の概念と空の概念を相別たんか差等の概念と平等の概念も亦相離れざるを得す例ひは中卷に於て宇宙は分合作用の類合を爲すに始まり分合作用の無限種なるより宇宙の進化に終りなしとする見解は力を無方廣なりとして力の意味する空を否定して力を相對的絶對の分合作用なりとして意識原働の右足なる力の概念に屬する差別の概念をして左足なる空の概念に屬する平等の概念と相離れしむるに依り大成するか故に本卷に於ては空は唯々方廣を意味して却て力の絶對存在を否定するを以て差等の概念は空の概念を離れ隨て平等の概念を隔だり平等の概念と所屬を異にするに至るか如し既に此二概念にして相離れんか此等の實驗學者にして此理を知らば平等説を唱ふの非なるを知り之と唱ひざるべし又差等説を唱ふの學者は此等の平等説を唱ふ實驗學者を排撃すると同時に耶徒若しくは佛徒の如く想像を喜ぶの教徒が唱ふ平等説をも攻撃するの非舉も出てざるべし左れば所謂の理學者が平等説を唱ふは宗教家の平等説を唱ふより平等の底意を穿たざること更に遠しと雖も尙ほ宗教家も尾して暗に共に空の平等寧ろ純同を證明すと謂ふべくして吾人の眞に同を以て認むべきの空を措て他に求むべからざるは明瞭なり例ひば効邊に遊歩を試むるとき紅花萬頃相連り恰も血潮を漲らすの状況を想像するも尙ほ各紅花を別視して紅花を血潮に誤らざるは結局分合作用が相對的絶對の差別を存するに依ると以て苟も力界を離れずして純同無差を考察せんは能はずと雖も宇宙に遍及する空に至りては上下なく高低なく左右なく邊隅なく實に絶對的絶對に同形なりと認めざるを得ざるなり

此理を推して考ふれば實驗學上所謂る平等若しくは同なる語は理想學より假用する語なるを以て實驗學の此語に假附する意義を削り去れば必ず純同の義を生すべくして而して此義の由來を求むれば唯々空を絶對的絶對に存在すと認むるに基くが故に吾人の眞に同ありとするの極意は空は如何なる點より觀るも絶對的絶對に均等にして無差別なりとするの外なしとする義なりと謂ふべし

第六章 空の純靜不動を論ず

凡そ動あれば靜ありと思ひ靜あれば動ありと思ふは意識相對の性質に出づるを以て一方に絶對的絶對の動あれば他方に絶對的絶對の靜ありと思ふも亦意識作用の自然なり左れば純動と純靜は果して存するかスペンサーは彼れが學說極意論に於て吾人は純動を觀念して止まざるも此觀念は唯々疑にして眞の知に非ずとし純動を意味するの外に殆ど他義なき靈力の觀念は却て之を眞知の如く認めしのみならず純動の純靜に對する義たるに至ては毫も論及せし所ならず然れども氏が純動ありと思ひ又なしと思ふへし時に方り他方に暗に純靜の有無を意識せしは意識相對の性質を推して固より疑ふべからず而して氏が純動を純靜に相對して解釋せず靈力の觀念を實と立つると同時に純動の觀念を假と定むるの撞着を犯せしは氏の動に對する學見が舊來物理學者の乳臭を脱せざるに依るのみ左れば古今無雙の大見家なるスペンサーの純動説も亦純動の有無を卜するに足らず隨て純靜の有無を決するの參觀とするに足らざるや疑なかるへし然れども純動と純靜は精密の觀察を以てするときは決して兩存として認むべきに非ず唯々之を認むるは意識原働の場合に在るのみ左れば意識原

働なる疑を精密にするの手段なる學術に於て純動を學礎と立つる時には純靜を否定し反して純靜を學礎と定むる處には純動を否定するは自然と謂ふへし左ればスペンサーが彼の所謂る學說極意論に於て純動の存在を疑ひしは理想學不適當の見解と認めて之を許すへしとするも彼れが理想學適當に於て意識原働を一基礎と爲せしの謬見たるは知るべきのみ予は曩に中卷に於て宇宙とは分合作用即ち空と時の汎稱たるの意なるを述ひたり茲に此意を推さは實驗學適當大乘に於ては宇宙を絶對的絶對の純動と認むるは明瞭なり其理由は他に非ず所謂る空は理想學の所謂る空の如く方廣を意味せず唯々分合作用を意味し時は理想學不適當の所謂時の如く知られたる力と空の繼續を意味せずフイフタイの所謂る理念伸展と一般に唯々合作用を意味するを以て所謂る空も所謂る時も分合作用其れ自身以下の諸者即ち分合作用の諸系統に對すれば相共に相對的の力を意味すと認むるを得るも實驗學に於て理想學大乘の所謂る空を否定する限りは實驗學大乘に於ては宇宙を絶對的絶對に純動と認めざるを得ざればなり果して然れば今や理想學大乘適當に於て純動の絶對的絶對なる存在を否定する上は絶對的絶對の純靜を肯定するは亦當然なり而して吾人が純靜として認むるに足る者は實驗學が否定すべき空にして即ち理想學大乘に於て既に無始無終と認むる空あるのみ

西洋理想學の沿革を觀るにブラットが偉大なる理念説を唱ひし以來アキナキスマンデスの空源説は學界より排斥せられ理想學上空を以て暗に理念の雙縮作用と認むるに至り純靜の觀念隨て發達する所あらずカントの如きは神を實體と認むるの大見に達し大に神を永存不

變と認むるの學見を發育せし所ありと雖も實體を暗に理念と認めたるを以て不變の意義を完ふし能はざりき此意義を完ふせざりしは彼れか神在説を學界より撤回せんと企たる原因なるべくして西洋理學の今日尙ほ完全せざる所以は此邊にも亦存すと謂ふも可なり果して然れば茲に空の純靜説を立つるに當りては理念説と妄像界を脱せざる代りに不開なる空源説の尙ほ幽靈とも爲りて消滅せざる古代理學者の見解に參觀を求むるは亦止むへからざるが故に理想理學と謂はんより寧ろ妄像に豊かなる印度理學者中開發せし學者なる佛徒に之を求むる所あらんとす佛徒の説に印度如來は最後の遺言を終り沙羅雙樹の間に入りて涅槃と爲りしと傳ふ此沙羅雙樹の間なる語の比喩語なるは固より論を俟たすと雖も佛徒の此語を用ひし精神を推さば佛徒が空を以て間隙と認むるの見解たるは明瞭なり然れども空を間隙の義に解するは常識にして學識に非ず眞に空解として學見たらしめんには實驗理學に於て之を分作用の意に釋し理想理學大乘に於ては之を方廣の義に解せざるべからざるは本章以上の諸章及び中卷に開論せし旨意を推さば明瞭なるが故に所謂沙羅雙樹の間は之を假りふ方廣と認めて此方廣の中に入りし如來の存法なる涅槃とは如何なる義なりやを問はんか佛徒の所見に依れば最滅爲樂の義ありと云ふ最滅とは何ぞや予の實驗理學より其最極義を叩かば分作用を指し理想理學大乘より之を叩かば分合作用の消滅を指すの義なるべし果して然れば茲に實驗理學上の見解を取り唯々分作用を指すとせんか之を快樂的作用と認むれば下語なる爲樂の義も亦觀る所なきに非ず然れども佛徒が最滅爲樂なる語の釋義を觀れば最滅爲樂とは至靜の境界に於て無限の快樂を爲すの状態と爲すが如し此義に依れば

所謂寂滅は力界を所謂業惡界と認めて之を絶滅するの義にして最滅爲樂の極義は唯々空界を極樂と爲すの意とも認め得へきも空に感覺ありとするは理想理學適當大乘の許す所に非ず然れども此下義を以て認めんこと佛徒の本意なりと思はざるを得ず其理由は他に非ず印度如來を始め佛徒の全体に不開の常人か神の存在を空中に妄像すると一般に所謂空中樓閣を畫く所爲を以て空の粗野なる觀念を以て想像の起點と爲すは明瞭の事實なればなり左れに最滅爲樂の極義を以て空界極樂の義とせんか釋迦の類が此想像を發せしは苦を動の特質と認むると同時に樂を靜の特質と認むるに依るを以て所謂涅槃説の如き暗に空の純靜を證すと謂ふべし然れども反對者あり佛徒の宇宙大源と認むる者は理若しくは法にして空に非ず故に佛徒も亦純靜の觀念ありと雖も純靜と認むる者は理若しくは法の性質を指して空の性質を指すに非すと云はんか抑も理若しくは法なる語は今日開明の實驗理學に於ても理想理學に於ても之を襲用すと雖も此語は前に示す如く未開の先人か宇宙を觀念し之を空に分折統合するに及んで何等の見る所も既に竭き止むなく空の若しくは心の本体を理若しくは法と假定せしより捏造せし語にして結局力を指すの外なきを以て今日に於ては唯々方の關係を假稱するに止まり力なる語に對して唯々從用語たるのみ假りに之を佛徒の所謂因果理に酌例して開示せんか此因果理の如きは未開の想像説なりと雖も茲に此説の所謂理法界は之を西洋人の所謂實體界を指すの義とし此説を見上げる上にも見上げて此説の因と果を予の分合作用に對比せんか因を合作用と認むれば分作用は之を果と認むべく反して合作用を果と認むれば分作用は之を因と認むべくして耶徒の所謂上帝を分合作用

に分拆し得るに至りとは雖も理想學に於ても此の如き結果に達せんには理若しくは法なる語を以て力なる語の從用語として使用せざるべからず果して然れば佛徒の所謂理若しくは法を以て之を實體の原質と認むるの極意は之を靈力と認むると同義なりと謂はざるべからず佛徒に此の如き精見なきは固より論を俟たずと雖も所謂因果理を靈力の關係を指すとし此理を精解せんか爲め耶徒の所謂上帝を分拆統合して予の實驗理學大乘と相異なる所の理想理學を講明せんには先づ眞誠なる實驗理學適當か絶對的絶對に否定して理想理學適當の大乘か絶對的絶對に肯定する者を求めざるべからず而して之を求むれば獨り空あるのみにして他に之を求むるも決して得べからざるなり左れば假りに佛徒か理若しくは法を以て宇宙の原質と認むるを彼れの表面的本意なりとすると同時に彼れに於て空を以て宇宙の原質と認むるを裏面的本意とするに係らす裏面の本意にして却て表面の本意より學見たるに近しとせば其の近き者を佛徒の眞意と假定して之を活解して參照するは他人の意見を參考するの正法なるべし然れば此反對ありと雖も佛徒の所謂涅槃即ち靜寂は暗に空の性質を純靜と認むる者と謂ふも可なり

若し此等の參觀を宗教界に求めんか獨り佛教のみならず古今の妄像神學者間に於て多々益々之を得へしと雖も煩を避けて唯々一二の神學者に之を求めんのみ凡そ宗教家は何派を問はず誤つて所謂現象界を浮世夢視するとも同時に絶對者の多數存在を假定すへき理を精解せず猥りに無限永世の羨むへきを主張し兎角く厭世の氣象を群羊に喚起せんとする傾向を免れずと雖も開發せし宗教家中毅然此傾向を絶たんとして獨得の見解とを立てたる者は

獨りマホメットあるのみ而して其獨得の見解とは他に非す前に示す如く神の宇宙に於ける目的は之を創造すれば則ち之を滅絶せしめ之を滅絶すれば則ち之を創造するに在るを以て神を除く外は無限の永世を得へうらす然れば佛徒の如く應身佛報身佛法身佛の撞着なる三説を假定し眞正の神を否定する上に禁慾を人類の最高手段を立つるの非なるは固より耶徒の如く禁慾を主とする佛徒の如く甚しきに至らざるも之を手段として神と共に無限永世を期するも亦是ならずされば我れは縱慾を以て最滅を謀るを以て却て神の目的に適ふと信すとする者は是れなり此の害たるや耶徒か小欲を以て神の目的に適ふと信して知らず識らず人性を傷ふを目的とするに劣る所なき者のみ蓋し此等の害は宗教家か實驗理學と理想理學を混し宗教主体の道義を説くに止まらず實驗道義に干渉せんとするの結果にしてマホメットの宗教家として此説の實行を望みしも亦權外の所爲たるも免れずと雖も此見解に於て神の永世不變を信すると同時に所謂現象界最終の状況を溶化なりと信せしは暗に空の純靜なるを認めたる所ありと謂はざるべからず其理由は他に非す所謂現象界最終の状況を寂滅と立るも神を永世不變と立つるも共に先づ空の存在を假定するを以て其の一方に神を永世不變と立つると同時に現象界最終の状況を寂滅と認むるの極意は空の純靜を認むるの義に外からざるを以てなり然ればマホメットの破壊説も亦間接に予の所謂空の純靜を認むと謂ふも可あり

耶徒の如きはダーウソンの進化説を外道と認めて之を非難せしもスペンサーが靈力説を公稱すると同時に進化説の伸暢を謀りしに及び非難を絶たざる中に竊かに同意を表し有名な

る牧師某は論教教會堂に於てスペンサーの進化説は最底の極意より觀れば我が教法と相容れて戻らすとし世間をも憚からず一大演説を爲せしことあり又ドラモンドの如きは精神界論なる一大書を著はし耶徒とスペンサーの進化説を對比して頻に此間に調和を務むる所ありたり蓋し耶徒の進化説に於けるダーウソンの之を唱ふときは絶對に之を排斥しスペンサーの之を唱ふに及ひ之を忍はんとせしはダーウソンの見解か其極意に於て日蓮の有神論に近きも之を認むる能はず之を絶對の無神論と認めスペンサーの靈力説を有神説に似たりと認めしこと其主因なるへし茲にトラモンドか精神界論の要意を推すにスペンサーの進化説は溶化説に對するの進化説に非ざるは固より論を突たさるか故に一方より觀ればマホメツトの溶化主義に似たるか如く又他方より觀れば吾人か大師耶蘇の粗見に對せし判釋の進化説に似たるか如く其主義の執れに存するや太た曖昧なると雖も氏の著生理論及び社會論を推して考ふれば氏は宇宙の目的を以て進化と認むるの見解と謂はざるへからず其理由は他に非ず此二論の主意に依れば生物の進化し若くは溶化するは主として外境の狀況如何に依りとするの精神なるを以つて此精神より觀れば上帝にして進化を許せば人類の如きも無限の進化を経ひて天國に入り上帝の傍に以て涅槃の境界に達すへしと認めんこと氏の本意ならざるへからざるを以てなり果して然れば氏の進化説か固定説に對する所見の是非如何は姑く之を措き吾人耶徒か人類は釋迦の所謂涅槃より一層涅槃の眞意に適ふ境界に達すへき運命ありとする見解に對しては暗に同意を表する所あればなりとするを以て其要意の精神と爲すか如し茲に此精神を觀ればトラモンドの如き耶徒はスペンサーの進化説か實驗理

學の進化説として觀るべき大價なき理由は曩に中卷に開述せし所を以て充分に明瞭なるか故に之を措き茲も特に必要とする所の所見を批評する所あらんとす抑も至樂説を唱ふは理想學適當大乘より見解を執るか將た理想亞大乘又亞大乘より見解を執るか若し後種大乘より見解を立つるとせば縱令ひ其見解は理想より寧ろ想像に近きも假りに之を理想と認むるも大過なかるべし然れども若し理想學適當大乘より見解を立つるとせば耶徒の進化主義はマホメツトの溶化主義(を理想學の解とせば)と共に謬見亦謬見たるへし其理由は他に非ず理想學大乘適當に絶對的絶對的存在を以て認むべき者は唯空あるに過ぎずと認めざるを得ざるを以て實驗理學適當の大乘に於ては分合作用其れ自身を分合作用以下の諸系統小對して絶對的に永存と認めざるを得ざるも理想學適當大乘に於て絶對的絶對に有始有終即ち無常と認めざるを得されはなり果して然れば耶徒か天國を想像して至樂境云々を説くは空の存在を想像するに基くと太た明瞭にして其至樂の境界に於て存すへしとする諸般絶對者なるソクレテイスの所謂唯一神の各部を以て堯舜の民と一般に天下大平の樂を樂とするも堯舜の民と異なり放歌を好まず極めて和靜の生活を爲すと妄像するの極意は純靜と認むるに至らざるを得ざるを以て耶徒の此の見解も亦予の空を絶對的絶對に純靜と認むるの一參證なりと謂ふも可なり

此三種の參觀に入らんとするに臨み古代の神學説は參觀するの必要なきが如く述ひたるは畢竟空を以て純靜と爲すの暗念は却て古代の神學説に於て多例を有し見新らしからざるに依るは固より論を突たす例ひは不動明王説若くは大黒天説の如き其極意を叩かは皆な空を

純静と爲すの一途に歸せざるなきか如し然れども茲に最も親易き一例と擧げて觀察せんとす其一例とは希臘の神學に所謂の高間原説是れなり高間原とは何ぞヤソクレティスの所謂の清氣と近世物理家の所謂の物の間に存在する少隙と萬億里の平原と認むるの義か又ハ俗言に所謂の空中の義か又ハデーカートが物質の本質と認めし方廣を指すの義か何れを指すと認むるも之を精解するときには支那人の所謂の天なる語か予の所謂の絶對的絶對の存在者なる空を暗指すると一般に之を暗指するの義と認めざるを得ざるは明瞭なり左れば所謂の高間原の諸神は此神學家の説く如く種々の狂藝を樂みと爲すとすも此神學家に於て此諸神を人間若しくは動物より動ひて靜なる道義者と認めたるは明瞭にして而して此神學家の之を認めたる意識の順序は先づ空を純静と認むるより起ることも亦明瞭なるを以て高間説の極意に於て空其れ自身のみならず空の純静をも意味するは固より怪むに足らざるのみ然れば推して此等古代の神學家に於て空の純静に粗念を起せし普通なるを知るべし
更に無神論者の意見も亦空の純静を意味する所以を觀察せんが爲め再び宗教家以外の理想學者間に還りヘーケルの意見を參考せんとすヘーケルはカントの門より出て師の實體説を利用して若しカントの純理論を理想學大乘と認むべしとせば之に對して理想學亞大乘とも認むべき唯心論を立てし有名なる人物にしてカントが宇宙の大源を實體なりと確信するも更らに進んで之れを觀念と認むべきを允當と爲し實體を觀念と認むる順序を進行せしとは雖もカントが恰も禪家の愚僧が見性成佛を以て宗教主体と妄像せし如く自由を宗教と立てし覆轍を踏みしのみならず非宗教を箴如せし甚しき人類にして造物主を拜念するは犬に均

しとするの暴見に陥りたり左れば氏は予が中卷に於て人類のみならず生物は悉く耶徒の所謂の上帝に類する大能者に進化するの期ありと實想せしと一般に實驗理學より寧ろ理想理學を以て暗に生物を見上げしとは雖も理想理學の所見を全ふせざるは固より論を俟たざるなり然れども氏の實體を觀念なりと斷定せし極意も空の純静を意味すと謂はざるべからず其理由は他に非理想理學適當大乘に於ても動と靜は相對する語なりと雖も靜は之を絶對的絶對に有常と認め動は之を絶對的絶對に無常と認むるを以て此大乘の主意に適ふは明瞭にして日蓮が所謂の法なる妄像物を以て有常と立て涅槃的の境崖に近き彌陀を無常と立てしが如き見解は其想像物を拜念の目的に立てし點に於て無情有常を有情無常と相混するに係らず暗に動靜の關係に於て觀る所ありとせばヘーケルか師の所謂の實體を觀念なりと判釋して宇宙の大源を觀念と認めたる極意は氏に於て所謂の實體の以外に於て實を以て目すべき目的物を知らざる上は實體なる想像物を以て實と認むるに在りと謂はざるべからず而して此想像物を以て實と認めんには先づ之を永存不變と認むるを以て之を認むるの精意を空なる理想物を永存不變と爲すの一途に歸すとせば氏が觀念を實なりとするは觀念を永存不變と認むるの義にして氏が之を此義に認むるの見解は實驗的の考察を主とせし孔子が智者は動く仁者は靜なりと爲せし野見にも劣るが如き觀あるに係らず此見解を已むべからずとせば其極意の空を永存不變と認むるに在ること明瞭と謂はざるべからず既に之を明瞭とせば此中に空を純静と認むるの意も自ら存するが故に予はヘーケルが宗教を誤見せし旨意も亦其極意に於て空の純静を意味すと認めんのみ

此等の諸參觀にして予の空を絶對的絶對に純靜なりとする所見を保證する既に此如く明瞭なりとせば空の絶對的絶對に純靜なるは疑ふべからず抑も實驗理學が主義とする所は理想理學は之を從義とし反して理想理學の主義とする所は實驗理學は之を從義とするも各々他の主義を從義とするに於て大に其意義を變更するを要するは予が帝權論民權論宗教論等を出版せし以來の特論にして理學大乘論に入るに及んでも更に動く所あらず故に此特論を推して純靜の觀念が意識原働より始まりて理想理學に入り完全するの順序を觀れば猶ほ純靜の觀念が意識原働より始まりて實驗理學に入り完全する順序と相異らざるが故に實驗理學適當大乘に於て宇宙原質の一特性を純動と認むるの允當あると同時に理想理學は其固有の領分を出でざる限りに於て宇宙原質の一特性を純靜と認むるの允當なるは既に明瞭なる上に所掲の如く空の絶對的絶對に純靜なる理由を證明せし所を推さば空の絶對的絶對に純靜なるも亦た之を認めて理想理學適當大乘中の一大乗と爲さんこと敢て失當に非ざるなり然れども反對者あり凡そ因は果を起すの能力なかるべからず實驗理學適當大乘に於て分合作用を宇宙の原質と立てたるも此點に於て大に觀る所あるに依らんか然るに理想理學適當大乘に於て空を宇宙の原質と認むるも空を純靜なりとして力に非すと認むる限りは力界即ち所謂の現象界なる果を起すの理由を解知すべからず左れば空を宇宙の原質と認むるの繼續として空質を純靜と爲すを已むべからずとせば空を宇宙の原質と認めんより寧ろ之を靈力と爲すこと大に允當なりと云はんか實驗理學適當大乘に於て分合作用を絶對的絶對因と立てたるは畢竟適當實驗の許す限りに於て力質以外の者を發見せざるより已むを得ざるに出

たるに過ぎず其理由は他に非す理想より視れば因は果と絶對的絶對に殊絶する者なるが如く思ざるを得ざるを以て實驗理學適當に於て理想を満足せしめざる時に於ては再び理想理學を講ずるの必要を起すも之を恐れて理想を満足せしめんとすれば却て本領を失ふべければなり然れば理想理學適當の大乘に於て唯々方廣として知られたる空を以て因と立つるは其の大乘の眞意に適ふ太な明瞭にして且つ古來想像を主とせし學者が法若しくは理なる想像物を大因に立て既に撞着に陥りしは因を絶對者と立つるの必要を感ずると同時に空の如き理想的絶對的理想を發せざるに依るも亦明瞭の事實なるを以て予は此反對者ありと雖も取るに足らざる淺見者なりとして空の絶對的絶對に純靜なるを認めて理想理學適當大乘の一乗と爲さざるを得ざるなり

第七章

理想理學適當大乘の以下理想理學適當に對する關係を論ず

前諸章に開述せし所を回顧せば先づ理想理學適當も亦必要なる所以に想察を起し空を宇宙の大源と認めざるを得ざるの見解に遷り空の性質は絶對的絶對に無限に且つ純同に且つ純靜なる所以を論定して遂に空は理想理學適當の因果理に於て必要とする絶對的絶對の因たるに適ふと認めたるは明瞭なり此主意を推さは空は徹顯徹尾分合作用の全体に遍及したるのみに非す分作用と合作用の間若しくは分作用と分作用の間若しくは合作用と合作用の間にも存在して立針の餘地をも遺す所なきを以て空其れ自身に就て想察するときは唯々絶對的絶對の無限に且つ純同に且つ純靜なる方廣として知るのみにして表裏中外の差別なく又

前後左右の差別なく眞に所謂無差別たるが故に如何なる構造理由ありて分合作用を生ずるやば理想學適當の適當見解を以て推及せんこと固より能はざる所なれば實驗學に敵對して分合作用を空の果と認むるも實驗學より空なる因が如何にして分合作用を起すやの詰問を受くるときは印度前後兩期の想像家若しくは支那想像家若しくは希臘の或る想像家の如きも下院の議員に撰み希臘の或る想像學者及び獨逸の想像學者を上院の議員に撰み幾回の評議を遂ぐるも自ら恥ざるべき辨解を與ひ能はざるは固より論を俟たざるなり左れば理想學は因の果を生ずるの理は縦合ひ之を研究すべきの期ありとするも其研究は瀟々の後譲り之を姑く本領の外に措かざるへからず然るも此の期は徒然唯々待つも固より到るへきに非されば之を待つの方法なかるへからず而して其方法は他に非ず空の無限純同純靜は假りに之を外質と認めて内質如何を研究すること唯々是れのみ抑も理學の本質如何に係り學者曾て見解を異にし或るは理學の本質は果に依りて因を定むるに在りとし或るは因に依りて果を定むるに在りとし或るは兩端に涉るとし紛亂を極めしのみ非ず今日尙ほ未だ充分に其惑を解かずと雖も理學を講ずるの目的は常識寧ろ記憶的常識でなく考察的常識か因果理に就て未だ研究せざる所は研究して之を補ふに在りて而して因果理を研究する主要は唯々因の性質を分拆統合して之を詳知するに在るを以て既に之を詳知せば因の果を生ずる方法の如きは隨て自ら明瞭すべきか故に第一の如きは唯々講學上の主手段を偏想し第二説の如きは所謂因の觀念か經驗に基くを知ざると同時に從手段を偏想し共に偏見たる免れざるを以て取るべきは唯第三説あるに過ぎざるは辨解を俟たずして明瞭なり左れば

茲に理想學を以て實驗學を補ふの必要ありとして實驗學の否定する諸者の中に於て最も理想に適ふ空の觀念を取り空を宇宙の大源と立つる上は先づ理想學は段落を終りと謂ざるべからず然るに空を宇宙の大源と立るの見解は空を唯々無限純靜と認め得べきに過ぎざるを以て實驗學に於て分合作用を宇宙の大源と立つる見解か宇宙現在の成立順序を示すと異り何等の成立順序を示さざるか故に茲に至り所謂空の唯々無限且つ純同且つ純靜の方廣を指し宇宙の本因たるを示すべき他意なきを以て空を度外に措き直に自体其れ自身に於て諸種の關係を示す者を追想して宇宙の大因を求設せんか遂に釋迦等の如く理想學の許認せざる妄像に陥らざるを得すと雖も先づ空を宇宙の大源と立て然る後靈力説若しくは唯心論等を立て之を想像するときは縦合ひ適當理想を去るも釋迦の如き妄像罪を犯すに至らず又耶蘇の如く小安の理想を甘する恐れなきか故に此方法に依り以下理想學を講ずるときは英國理學派か獨逸理學派を攻撃せしか如き非難の雷鳴は自ら理學界を去り復さ起らざるへし

抑も英國理學派か獨逸理學派を攻撃する裏面の眞意は獨逸理學派か講學の方法を順行せざるを責むるに在りと雖も之を攻撃する方法たる恰も無謀の人民か君主に意外の所願を述ふるに常識を以てすると相異ならざるを以て折角の忠告も獨逸理學派の容れずして終るに依り獨逸理學派は遂に英國派より暴君と一般に獨裁妄斷者の綽號を受け其餘怒は驅つて益々岐路に至らしめたるか故にカントか實體説を發見せし以來は絶て理想學上の發見なきを以て歐州の理想學は隨て萎靡不振の状態に在りと雖も予の以下理想學を講修するに

及んでも尙ほ理想學上の參觀は主として之を歐州の理想學に求めざるへからず殊に大師スペンサーの發見せし靈力説の如きは大師の表意的目的は理想學の發達を目的とせしに非ざるも最も有効の參觀たるは疑ふへからず故に歐州の理想學界を參觀の主とし此他諸州理想學界を參觀の從とし本卷理想學適當大乘の以下理想學の主意如何を考察せは此大乘に亞く理想學は先づスペンサーの靈力説を修正して假りに空の本体を靈力と認め之を分拆統合して理想學適當の亞大乘を立つるに在り之に亞く理想學はブラットの唯心論を修正して假りに靈力の本体を心と認め之を分拆統合して理想學適當の亞大乘又亞大乘を立つるに在るは前諸章に開述せし所を推して明瞭なるへし故に此二種亞大乘以下の理想學に係る主意の差別は唯心理學を講了するの時に譲り茲に理想學適當大乘か靈力理想學大乘并に唯心理學に對する關係を主として此大乘の以下理想學に對する關係の大意を示す所あらん

曩に中卷の結論に於て實驗理想學大乘の以下實驗理想學に對する目的を論ずるに當り實驗理想學適當の大乘は以下實驗理想學不適當部に立て講學の方針に就き參觀を與ふの意を述べたり此意を推して實驗理想學適當大乘の以下實驗理想學に對する効用如何を觀察せんか例ひは生理學を講するに當り宇宙の原質か無限種の内外分合作用なること其各分合作用の自主自由なること其各分合作用に類合の順序あること宇宙の變化か進化を主義とすることを考照するか如きは生物か無限の進化を遂くへきや否やの問題に係つて偉大の効用あること更に疑ひなかるへし果して然れば理想學適當大乘の以下理想學に於ける亦此の如き効用あるか實

驗理想學適當大乘は宇宙を分拆統合して宇宙の明瞭なる關係を示すも理想學適當大乘は宇宙を分拆統合して唯々無限且つ純同且つ純靜の方廣と爲し更に方廣其れ自身の間に關係を示さざるか故に此の如き効力なきは固より論を俟たずと雖も尙ほ効力の存するは疑ふへきに非ず例ひは靈力の無限且つ純同且つ純靜如何を論ずるに當たり靈力の原義を無限且つ純靜なる方廣を指すの意と認むるときは間接に予の著内界理學大乘及び外界理學大乘の論(未刊)を參觀すると同時に直接に理想學適當大乘を參觀して靈力の原義を無限且つ純同且つ純靜なる方廣を指す意と認むるときは靈力を無限且つ純同且つ純靜と認め易きの効力あり又内界理學大乘を間接の參觀と爲すときは同時に靈力大乘を直接の參觀と爲すときは心の無限且つ純同且つ純靜なるを信し易きの効力あるか如し之を推さは理想學適當大乘の以下理想學全体に對して効用の存するは疑ふへからざるに非すや例ひは既に唯心理學大乘以下の理想學に係る主意の差別は此大乘を講了する後に示すべく述ひしも假りに幽靈理學ありとせんか唯心理學を參觀して此學を講ずるときは上卷及び予の宗教論に於て暗に示す如く萬物の原質を絶對全能と認め得べくして遂に幽靈の全体を上帝と認めて之を敬信するに至るか如し(此事子の宗教論及び理學大乘)左れば此大乘の以下理想學に對する効用も亦明瞭と謂ふへし

更に約言せば人類か無限の進化を保つの最大要義は心身の意味する内界の分合作用をして宇宙他部の内界分合作用を類合せしむるに在りて而して此最大要義を執行する最要手段は理想學を實驗理想學の消極に立て、實驗理想學の進化を保つに在るか故に理想學をして此

効用をなさしめんには先づ理想理學適當の大乘を論明して之を以下理想理學の參觀と爲し理想理學全般の効用をして之を充分ならしむるは極めて必要なりと謂はざるへからず更に再ひ約言せば第一章に示せし如く意識の偉大なる原働を意味する理學不適當より一步を進めて此原働の右足的衍義を意味する實驗理學適當をして更は偉大ならしめたと共に左足的衍義を意味する理想理學適當をして更に偉大ならしむるも亦必要なりと謂ふべきのみ

理學大乘論大尾

明治三十一年五月廿四日印刷
同 年五月廿七日發行

定價三拾五錢

日本橋區上槇町八番地小島法律事務所
寓島根縣松江市外中原町八番地平民
著作兼發行人 山口松五郎

芝區愛宕下町四丁目壹番地
印刷人 勝浦惟明

芝區愛宕下町四丁目壹番地
印刷所 惟明堂

日本橋區日本橋通三丁目

丸善株式會社書店

神田區裏神保町七番地

明法堂

版權
所有

所捌賣

